# SYNTHESIS 2012

シンセシス

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 2012

# INDEX

01 **研究所概要** …… 01

02 **研究所活動** …… 07

公開講座報告

月例研究報告

ランゲージ・ラウンジ活動報告

03 **研究プロジェクト** …… 47

04 **研究業績** …… 59

# 01 研究所概要

# 2012年度
# 教養教育センター付属研究所概要

## Ⅰ．組織

◆研究所運営委員会執行部

所長：鈴木義久

主任：三角明子　猪瀬浩平

研究部門運営委員：大森洋子　黒川貞生

◆研究所所員

池上康夫　石渡周二　猪瀬浩平　植木献　上野寛子　大森洋子　越智英輔　亀ヶ谷純一
金珍娥　黒川貞生　佐藤アヤ子　佐藤寧　嶋田彩司　鈴木義久　高木久夫　高桑光徳
武光誠　張宏波　鄭栄桓　永野茂洋　名須川学　仁科恭徳　橋本肇　原宏之　原田勝広
福山勝也　三角明子　森田恭光　寄川条路　渡辺祐子　Grimes-MacLellan, D.M.
Varden, J. K.　土屋博嗣

◆研究所運営委員会（＊＝代表者）

・『SYNTHESIS』（年報） 担当：＊鈴木義久 三角明子 猪瀬浩平

## Ⅱ．研究活動

1．研究プロジェクト（＊＝代表者）

◆「教養教育としてのカフェ」研究：カフェ・ネットワークの構築とその意義
　＊植木献　　猪瀬浩平　　上野寛子　　三角明子

◆「中国文化」へのまなざしを豊かにする中国語初中級カリキュラムのための基礎研究
　＊張宏波　　大森洋子　　渡辺祐子

◆筋収縮タイプの違いが皮質脊髄路の興奮性、筋線維および筋出力に及ぼす影響
　＊黒川貞生　　亀ヶ谷純一　橋本肇　　Pedro Valadaso　Avela Janne　Taija Finni

◆青少年の健康状況と身体特性の関連性
　＊越智英輔　　福山勝也　　森田恭光

2．研究報告会

| 日付 | 報告者 | テーマ |
|---|---|---|
| 第一回（ 6／13） | Grimes-MacLellan,D.M.氏 | Gender and education in contemporary Japan<br>「現代日本におけるジェンダーと教育」 |
| 第二回（11／14） | 池上康夫氏 | 「トウトウタラリタラリラ」は陀羅尼歌か |
| | 佐藤　寧氏 | The Syllable Is Not a Universal Prosodic Unit--A case of Japanese |
| 第三回（12／12） | 仁科恭徳氏 | コーパスで何が出来るか、何が分かるか |
| | 黒川貞生氏 | 「最大随意等尺性収縮および伸張性収縮中の皮質脊髄路および脊髄路の興奮性変調」 |

## Ⅲ．教育活動

≪学内語学試験≫

| | 校舎 | 日付 | 受験者数 | 受験者合計 |
|---|---|---|---|---|
| TOEIC IP試験 | | | | |
| ＜第一回＞ | 横浜 | 6／20（水） | 84名 | 177名 |
| | 白金 | 6／23（土） | 93名 | |
| ＜第二回＞ | 横浜 | 10／17（水） | 79名 | 199名 |
| | 白金 | 10／20（土） | 120名 | |
| ＜第三回＞ | 横浜 | 12／19（水） | 129名 | 233名 |
| | 白金 | 12／15（土） | 104名 | |
| TOEFL ITP試験 | | | | |
| ＜第一回＞ | 横浜 | 6／27（水） | 88名 | |
| ＜第二回＞ | 横浜 | 10／ 3（水） | 85名 | |

≪講座≫

◆短期講座◆

| 講座名 | 校舎 | 曜時限 | 期間（コマ数） | 講師 | 受講者数 |
|---|---|---|---|---|---|
| DELE試験準備講座<br>＜文法・語彙編＞ | 白金 | 10:00～<br>13:00 | 9／7, 11～14<br>（全10コマ） | 仲道慎治氏 | 10名 |
| DELE試験準備講座<br>＜実践編＞ | 白金 | 14:00～<br>17:00 | 9／7, 11～14<br>（全10コマ） | Eugenio Del<br>Prado氏 | 10名 |
| DELE試験準備講座<br>＜文法・語彙編＞ | 白金 | 10:00～<br>13:00 | 3／11～15<br>（全10コマ） | 仲道慎治氏 | 9名 |
| DELE試験準備講座<br>＜実践編＞ | 白金 | 14:00～<br>17:00 | 3／11～15<br>（全10コマ） | Eugenio Del<br>Prado氏 | 8名 |
| 手話特別講座 | 白金 | 3・4限 | 3／18～22<br>（全10コマ） | 荒木泉氏<br>川島絹代氏 | 21名 |
| ドイツ語技能検定試験<br>4級対策講座 | 横浜 | 水4 | 10／3～11／21<br>（全8コマ） | 佐藤修司氏 | 9名 |

◆通年講座◆

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| DELE準備講座 | 白金 | 水5 | 4／11～10／10<br>（全14コマ） | Eugenio<br>Del Prado氏 | 2名 |
| DELE準備講座 | 横浜 | 水4 | 11／7～1／9<br>（全8コマ） | Eugenio<br>Del Prado氏 | 4名 |
| ハングル能力検定試験<br>対策講座（春5級、秋4級） | 白金 | 木4 | 4／12～<br>（全28コマ） | 高槿旭氏 | 春：2名<br>秋：2名 |
| ハングル能力検定試験<br>対策講座（春5級、秋4級） | 横浜 | 火4 | 4／10～<br>（全28コマ） | 朴美恵氏 | 春：2名<br>秋：2名 |
| 中国語コミュニケーション・<br>検定試験講座4級 | 白金 | 火4 | 4／10～<br>（全28コマ） | 鈴木健太郎氏 | 春：4名<br>秋：1名 |
| 中国語コミュニケーション・<br>検定試験講座4級 | 横浜 | 金4 | 4／13～<br>（全25コマ） | 竹中佐英子氏 | 春：5名<br>秋：5名 |
| ドイツ語3級検定講座 | 白金 | 木5 | 4／12～<br>（全28コマ） | 小山田豊氏 | 春：2名<br>秋：2名 |

TOEIC講座

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ＜試験対策講座＞<br>春学期 | 白金 | 土3・4 | 6／2～30<br>（全10コマ） | 長谷川剛氏 | 20名 |
| ＜試験対策講座＞<br>秋学期 | 白金 | 土3・4 | 11／10～12／8<br>（全10コマ） | 長谷川剛氏 | 22名 |
| ＜夏季集中特訓講座＞<br>基礎コース | 横浜 | 2・3 | 8／27～9／4<br>（全14コマ） | 中村道生氏 | 20名 |
| ＜夏季集中特訓講座＞<br>実践コース | 白金 | 2・3 | 8／27～9／4<br>（全14コマ） | 長谷川剛氏 | 19名 |
| ＜春季集中特訓講座＞<br>基礎コース | 横浜 | 2・3 | 2／14～22<br>（全14コマ） | 中村道生氏 | 13名 |
| ＜春季集中特訓講座＞<br>実践コース | 白金 | 2・3 | 3／4～12<br>（全14コマ） | 長谷川剛氏 | 23名 |

## Ⅳ．その他

≪大学公開講座≫

◆巡礼－そのさまざまなかたち

| | 日付 | 講演テーマ | 講演者 |
|---|---|---|---|
| 第1回 | 9/29 | イスラームのメッカ巡礼　歴史認識と現在 | 大川　玲子氏<br>明治学院大学国際学部准教授 |
| 第2回 | 10/ 6 | 巡礼者と定住者のサンティアゴ巡礼 | 中島　聡子氏<br>立教大学 |
| 第3回 | 10/13 | ネパールにおける巡礼<br>ヒンドゥー教と仏教のまじわる場所 | 森本　泉氏<br>明治学院大学国際学部准教授 |
| 第4回 | 10/20 | 再生の聖地－熊野詣の歴史と文芸－ | 嶋田　彩司氏<br>明治学院大学教養教育センター教授 |
| 第5回 | 10/27 | 時代を映す四国遍路 | 門田　岳久氏<br>立教大学 |

≪刊行物≫

・明治学院大学　教養教育センター付属研究所年報　『SYNTHESIS 2012』3月発行

# 02 研究所活動

## 2012年度明治学院大学秋学期公開講座報告

# 「巡礼　そのさまざまなかたち」

鈴木 義久　教養教育センター附属研究所所長

### 講座のテーマ

巡礼は世界各地で昔から行われているが、ひとはなぜ巡礼に出るのだろうか。

巡礼ということになればそれまでの生活圏を離れ、聖地、あるいは霊場へと向かことになる。それが長期にわたり、やがて戻ってくるまでの期間、何ら生計費を得られないとすれば、あらかじめ蓄えが必要となる。さらに、自由業であろうと宮仕えであろうと、休む場合は当然、商売相手や職場など、周囲の理解も不可欠となる。こうしたさまざまな困難を排除し、一途に聖地を目指すからには、それなりの強い思いからなのだろう。もちろんそれは主として宗教的な動機からであろうが、ほかに理由はないのだろうか。

形式的には普通の旅も、宗教的な動機の欠落と期間的に短いことを別にすれば、巡礼と何ら変わらないようにも思われる。特に帰路などは、つとめを果たした安堵感から、慰安と観光の旅になりそうな気がしてしまう。巡礼の往復の道程の実態はどんなものなのだろうか。

今年度、教養教育センター附属研究所が主催する明治学院大学秋学期公開講座は、このような素朴な疑問が発端で企画され、さまざまな分野の研究者にそれぞれの観点から、世界や日本で昔から行われている代表的な巡礼のありようをお話ししていただいた。

多様なメディアを媒体に、巡礼の実像に関する情報に数多く接することができる今日だが、講演者ご自身の巡礼体験に基づく講演をはじめ、それぞれの講演からもまた、異なった何らかの果実が得られたことと確信している。

### 講座日程（担当講師・講演題目）

講座は以下の日程で実施された。台風に前後を挟まれた回もあり影響が心配されたが、幸いいずれの回も好天で順調に実施できた。

第1回（ 9月29日）　大川玲子「イスラームのメッカ巡礼　歴史認識と現在」
第2回（10月06日）　中島聡子「巡礼者と定住者のサンティアゴ巡礼」
第3回（10月13日）　森本　泉「ネパールにおける巡礼　ヒンドゥー教と仏教のまじわる場所」
第4回（10月20日）　嶋田彩司「再生の聖地ー熊野詣の歴史と文芸ー」
第5回（10月27日）　門田岳久「時代を映す四国遍路」

### 公開講座を振り返って

今回の講座には本学学生を除いて、109名（男性64名、女性45名）の受講者があり、前回（2010年度公開講座）の108名とほぼ同数だった。このほか、当日受付の学内者が5名あった。出席率は前回の67%から76%に上がったが、毎回穏やかな好日であったこともあろうが、アンケートで受講者から好評が多く寄せられていることから、内容的にも受講者の満足できる講演であったことに

よるものと考えられる。少し紹介すると、「分かり易い。気取らない。ユーモアも忘れず」、「資料も豊富で理解しやすい」、「テーマにバラエティがある」、「充実した講座になっている」といったような評があった。ひとつ「もう少しlevelを上げた方がいいのでは」といった声もあったが、本公開講座ではリピーターの受講者が多く（今回は79.8%）、これまで毎回60代以上の受講生が総数の多くの割合を占めており（今回は91.6%）、今年度の公開講座も「わかりやすさ」を念頭に企画した。当方の狙いは、ほぼ期待通りのものとなったと考えている。

ただ残念なことに、前回2010年度の開催時と同様、やはり開催日が土曜日というハンディがあったためか、本学学生の姿がほんのわずかだった。今回は図書館のご厚意で、公開講座開始前から図書館入口内に講座紹介の資料展示コーナーを設けて、学生に興味を持ってもらう新たな機会が提供されていただけに、余計残念だった。

## 受講状況

●受講者数　109名

| 男性 | 女性 |
|---|---|
| 64名 | 45名 |

●受講者住所

| 戸塚区 | 戸塚区以外 |
|---|---|
| 73 | 36 |
| 67% | 33% |

●受講者　年齢層別分布

| 20代以下 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代 | 80･90代 | 不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 1 | 0 | 6 | 33 | 54 | 12 | 1 |
| 1.84% | 0.92% | 0% | 5.5% | 30.27% | 49.54% | 11.01% | 0.92% |

●受講者（継続・新規受講者）

| 継続 | 新規 | 全体 |
|---|---|---|
| 87 | 22 | 109 |
| 79.8% | 20.2% | 100% |

●出席状況　　受講生109名　その他（当日受付の学内者）5名

| | 9/29 | 10/6 | 10/13 | 10/20 | 10/27 |
|---|---|---|---|---|---|
| 受講者数 | 84 | 78 | 80 | 90 | 82 |
| 出席率 | 77% | 71.5% | 73.4% | 82.6% | 75.2% |

2012年度明治学院大学秋学期公開講座報告

# イスラームのメッカ巡礼
# 歴史認識と現在

大川 玲子　明治学院大学国際学部准教授

## 1．はじめに

イスラームのメッカ巡礼（ハッジ）を知ることは、筆者のような非ムスリム（イスラーム教徒）の研究者にとって簡単ではない。なぜならば、サウジアラビアにある、預言者ムハンマドが生まれイスラームを説いた聖地メッカには、異教徒が入ることは禁じられているからである。よって本稿は、直接のフィールド経験から得られたものではない。

ただ、イスラーム教徒の巡礼も他文化圏の巡礼と共通点を持っている。巡礼とは、日常を離れて非日常世界に入り、神などの超越的存在と出会うことである。そしてそれまでの生活や人生を振り返り、また再び元の生活に戻っていくエネルギーをチャージするのである。これは恐らく、どのような形態をとるにせよ、巡礼者たちすべてが感じることではないだろうか。

## 2．イスラームの「五行」と巡礼―憧れとしての巡礼

### (1)「五行」の一つとして

メッカ巡礼は、イスラームの基本的儀礼である「五行」の一つとして規定される。他の四つの行は「信仰告白」「礼拝」「断食」「喜捨」である。このなかでも「巡礼」は最も実現が困難で、実際には健康面と財政面に支障のない者のみが行うものとされ、絶対的な義務ではない。

### (2) 大巡礼（ハッジ）と小巡礼（ウムラ）

巡礼は時期によって「大巡礼（ハッジ）」と「小巡礼（ウムラ）」の二つに分けられる。一般的なメッカ巡礼は「大巡礼」の方を指し、イスラーム暦の巡礼月上旬にメッカで執り行われる（2012年は10月24日-26日であった）。「小巡礼」は特に時期を問わないが、「大巡礼」が図１と図２の場所を巡るのに対し、「小巡礼」は図１のみを巡るだけとなる。よって費用に関して言えば、人気もあり時間もかかる「大巡礼」の方が明らかに高額となる。

また「大巡礼」が終了した後、「犠牲祭」と呼ばれるお祝いが行われるが、これはメッカのみでなく、世界中のイスラーム教徒が行い、イスラーム国ではこの日は祝日となる。人々は羊などを屠り、その肉の一部を貧者に分け与えた後、家族親戚が集まってご馳走を食べ、ハッジが無事に終わったことを祝う。このように「大巡礼」にはメッカに行かなかった世界中のイスラーム教徒たちも、精神的には参加していると言えるだろう。

### (3)「ハーッジュ」「ハーッジャ」

巡礼を終えて戻った者はその後、敬意をもって「ハーッジュ（男性巡礼経験者）」や「ハーッジャ（女性巡礼経験者）」と呼ばれるようになる。これは言うまでもなく、メッカ巡礼への憧れとそれを果たすことの困難さを表している。

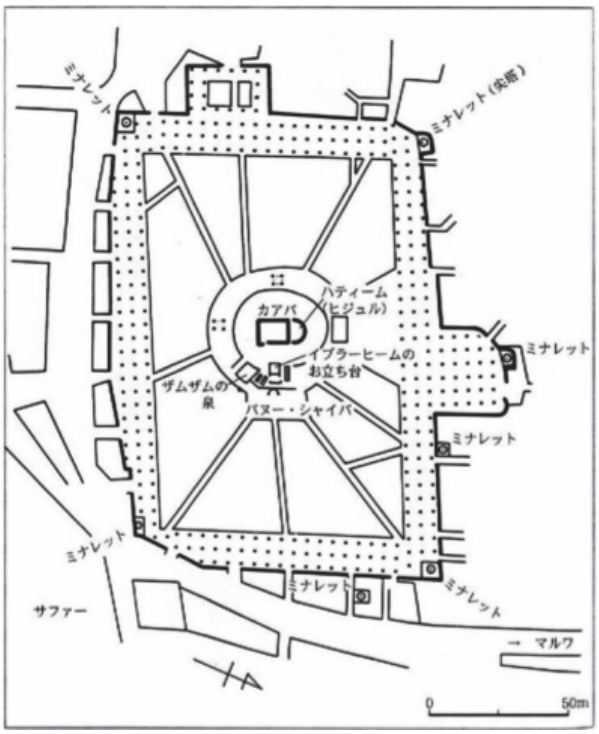


図１．カアバ神殿周辺
（坂本勉『イスラーム巡礼』より）

図３．ザムザムの泉からの水を詰めたペットボトル。カアバ神殿の映像が印刷されている。（筆者所有）

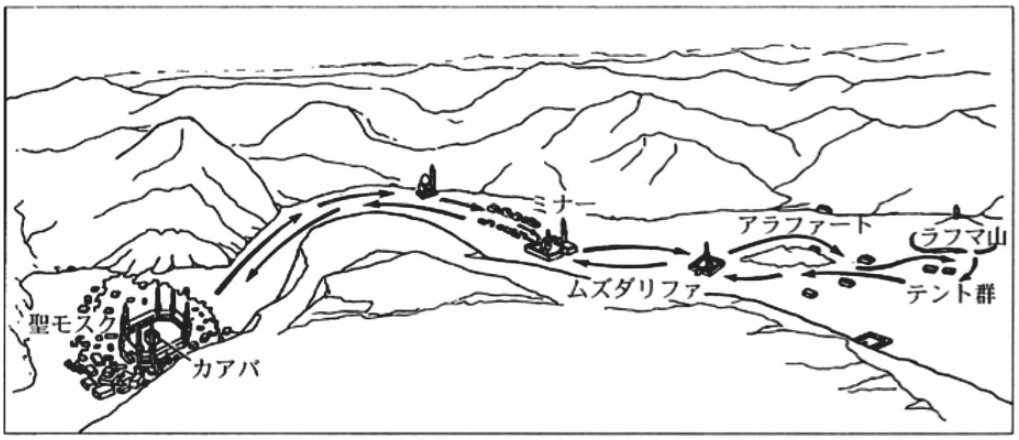


図２．大巡礼の経路（坂本勉『イスラーム巡礼』より）

### 3．歴史認識―コーラン（クルアーン）のなかの巡礼

#### (1) 儀礼

メッカ巡礼の儀礼は、イスラームの聖典クルアーン（「コーラン」のアラビア語原音）が言及しており、現在にいたるまでそれが踏襲されている。例えば3章96-97節で、カアバ神殿への巡礼はそれが可能な者への義務であることが述べられている。（以下にある「バッカ」は「メッカ」のことである。また「イブラーヒーム」については後述。）

> 人々のために建てられた最初の聖殿はバッカにあるあれだ。行きとしいけるものの祝福の場所として、また導きとして（建てられた）もの。その内部には数々の明白な御徴がある――（たとえば）イブラーヒーム御立処など。そして誰でも一たんこの（聖域）に踏込んでしまえば絶対安全が保証される。そして誰でもここまで旅して来る能力がある限り、この聖殿に巡礼することは、人間としてアッラーに対する（神聖な）義務であるぞ。（井筒俊彦訳『コーラン』岩波文庫）

その他クルアーンでは、メッカで人々は「イフラーム（禁忌）」の状態になり、白い巡礼衣を着て、殺生や性交渉が禁じられることが述べられる（5章2節など）。またカアバ神殿のまわりを7周回る儀礼（タワーフ）について（22章29節）やサファーとマルワを3.5往復する儀礼（サアイ）について（2章158節）など、細かく規定されている。

#### (2) アブラハム

儀礼に関する記述に加え、クルアーンはメッカに関する歴史的経緯についても多く述べている。そこでは特にアブラハム（アラビア語で「イブラーヒーム」）がメッカ建立に関わったことが示唆されている。これはイスラームがユダヤ教・キリスト教の影響を受けて成立したことを意味している。（ただしイスラーム教徒の見方によれば、ユダヤ教・キリスト教もイスラームと同じ神を信じ、同じアブラハムの教えを継承しているということになる。）

前に引用したクルアーンの句に「イブラーヒーム御立処」というものがあった（図1の「イブラーヒームのお立ち所」のこと）。実際にここには足形のようなものがあり、ガラスで覆われている。イスラーム教徒にとってはイブラーヒームつまりアブラハムが、かつてここに立っていたことを実感する重要なモニュメントである。イスラームの歴史認識によれば、カアバ神殿はアダムとイブによって建てられ、ノアの時代の洪水で流失した後、アブラハムが再建したとされる。

アブラハムはハガル（アラビア語で「ハージャル」）との間に長男イシュマエル（「イスマーイール」）をもうけた。ハガルはイシュマエルが幼い頃、水を探すためにサファーとマルワ（図1）を駆け回ったとされ、それが前述したサアイの儀礼で再現されている。その時に見つけた泉がザムザムの泉とされる（図1と図3）。人々はハガルの苦労を忍び、アッラーの慈悲を請う。またミナー（図2）において、悪魔の石柱（ジャムラ）に小石を投げつけるラムイという儀礼を行う。これはアブラハムが息子イシュマエルをアッラーにささげるために殺そうとした時（37章102-109節）、悪

魔の誘惑を拒むために石を投げたという故事に由来しているとされる。このようにメッカ巡礼にはアブラハムの影響が強く見られる。アブラハムはイスラームにとって一神教を説いた重要な預言者であり、その息子イシュマエルは父とともにカアバ神殿を再建したアラブの民の祖とされている。（他方、アブラハムの次男イサクはユダヤの民の祖とされる。）イスラーム独自の歴史認識がメッカ巡礼のなかに組み込まれ、ここに集う人々はそれを実感することになる。

## 4．現在の姿―巡礼者たちとメッカ

### (1) 巡礼者たち

日本人最初の巡礼者は、1909年に参加した山岡光太郎と考えられる。当初はスパイ活動が目的で入信したとも言われるが、巡礼後は敬虔なムスリムとして生涯を送ったと伝えられる。また田中逸平は1924年と1934年にメッカ巡礼を果たしている。彼は中国で入信し、「イスレアムとは独一無二の神に対する絶対帰依の義だ。巡礼とは一切の私を捨てて、神に一歩一歩近寄る道行だ」と述べ、その後も熱心な日本人イスラーム教徒として活動を続けた。

アメリカのアフリカ系（黒人）ムスリムの代表的人物として知られるマルコムXもまた、1964年に巡礼を果たしている。彼はNOI（ネイション・オブ・イスラーム）で頭角を現した。だがこの組織は黒人を至上とし、白人を悪魔として憎悪する思想を主張していた。マルコムはメッカ巡礼においてアッラーの前での人間の平等を実体験し、イスラームにはどのような人種差別もないことを認識する。彼は巡礼について「あらゆる人種、肌の色の人びとが世界中から集まって一つになる！これこそ唯一神の証しでしょう」と述べている。その後、白人憎悪からの脱却を果たし、NOIから脱退した。ただし巡礼翌年に暗殺されたため、その平等思想を展開する時間をもつことはできなかったが、その思想はアメリカのアフリカ系ムスリムに大きな影響を与えた。このように巡礼者は巡礼を果たすことで、大きく人生の方向を変えている。

(2) サウジアラビア政府と巡礼の近代化

年に一度の「大巡礼」には、約200万人のイスラーム教徒が全世界から集まる。2006年のサウジアラビア政府の公式発表によれば238万人で、そのうち海外からが165万人である。また巡礼に参加する者は必ずサウジアラビア政府からハッジ・ビザを発行してもらう必要がある。交通手段の発達もあり、巡礼希望者は年々増加している。

イスラーム第一の聖地であるメッカを擁するサウジアラビア政府は、それゆえに権威が認められている。サウジアラビア国王の称号「二大聖地の守護者」は、メッカとメディナ（預言者ムハンマドの墓がある）という二大聖地を管理する者としての威厳を示している。

1980年代より、メッカではカアバ神殿の拡張や改築、周辺地区の開発に加え、道路や橋、ミナーのテントや犠牲祭用の屠畜場建設、冷房や医療などの整備が進められてきた。これは言うまでもなく、サウジアラビア政府の資金力によって可能となったことである。ただし昨今、カアバ聖殿周辺

のホテル建築ラッシュによる景観激変への懸念も示され、巡礼希望者の急増と近代化の波のなかで、メッカが今後どのような巡礼地となっていくのかが注目される。

## 5．さいごに

イスラーム教徒にとってメッカ巡礼は、世界中の同胞と集い、同じ儀礼を行うことで連帯や統一性を体感する重要な機会となっている。それと同時に、アッラーに祈りをささげ、アブラハムやムハンマドといった先人（イスラーム教徒にとっては預言者）たちの生きざまを実感する場所でもある。このように空間と時間を超えた特別な非日常が巡礼によってもたらされるのである。それは巡礼者の人生観を変えるほどの力を持ち、一種の再生の場になり得ると言えるだろう。

## 参考文献

井筒俊彦訳『コーラン（上中下）』岩波文庫、1957-1958年。
マルコムX（濱本武雄訳）『マルコムX自伝（下）』中公文庫BIBLIO、2002年。
坂本勉『イスラーム巡礼』岩波新書、2000年。
田中逸平『イスラム巡礼 白雲遊記』論創社、2004年。
野町和嘉『カラー版 メッカ―聖地の素顔』岩波新書、2002年。
野町和嘉、サイイド・ホセイン・ナスル『メッカ巡礼 野町和嘉写真集』集英社、1997年。
前嶋信次編『メッカ』芙蓉書房、1975年。
水谷周『イスラーム巡礼のすべて 』（イスラーム信仰叢書）国書刊行会、2010年。
水谷周『イスラームの原点―カアバ聖殿 』（イスラーム信仰叢書）国書刊行会、2010年。

2012年度明治学院大学秋学期公開講座報告

# 巡礼者と定住者のサンティアゴ巡礼*

中島 聡子（立教大学）

## ＜はじめに＞

スペインの北西部にあるサンティアゴ・デ・コンポステーラはローマ、エルサレムとならぶカトリック教会の三大聖地のひとつである。十二使徒のひとりである聖ヤコブの遺骨がイベリア半島の北西部に運ばれたという伝説に続き、９世紀に聖ヤコブの墓がサンティアゴ・デ・コンポステーラ近郊で発見されたという噂がヨーロッパ中に流布すると、その聖遺物崇拝のために多くの信徒が各地からこの地を訪れた。12世紀になるとサンティアゴ・デ・コンポステーラに到着した巡礼者の数は、年間50万人を超えたと言われている。近年においては、サンティアゴ巡礼は再び世界中から注目を集めるようになり、信者のみならず、多くの人々が世界中からサンティアゴ巡礼を歩きに訪れる。2004年にサンティアゴ・デ・コンポステーラに到着した巡礼者の数は約18万人に及んだ。

公開講座では、本題に入る前にキリスト教が布教される以前のガリシアの土着信仰の話や、中世におけるサンティアゴ巡礼の様々な道、迂回路などの説明、巡礼のモチベーションを高めた聖ヤコブの奇跡談、そして近世における聖ヤコブ信仰の衰退をもたらした要素の一つに関しても、対抗宗教改革の影響を受けた聖人信仰の変化を中心に述べた[1]。ここではそれらは全て省略し、公開講座の中心テーマである巡礼者と定住者によってつくられたサンティアゴ巡礼のコミュニティについて簡単に述べたい。結論を先に述べると、サンティアゴ巡礼は巡礼者と定住者の関係性によってつくられ、その発展が可能になった。サンティアゴ巡礼は、中世においても現代においても、巡礼者と定住者の相互扶助によって成立し、この両者の間に助け合いの巡礼コミュニティが成立したことこそが中世と現代におけるサンティアゴ巡礼の振興の成功を可能にしたといえるであろう。

## ＜巡礼者と定住者の間のギブ・アンド・テイク＞

中世イベリア半島において、巡礼者は、その各人の経済的状況に関わらず、貧者と見なされた[2]。中世における貧者の定義には、経済的に困窮している人々だけではなく、自ら貧しい生活を選んだ人々、すなわち、聖職者や旅人、そして巡礼者も含まれたからである。中世イベリア半島において、前者の貧しさは苦悩であり、そして後者の貧しさは美徳であった。苦悩、そして美徳の貧者に関して、中世イベリア半島においては、迷惑、あるいは否定的な存在というような認識はなく、彼らは聖なる貧民と見なされた。中世イベリア半島における貧民観は肯定的なものであった。

というのも、貧者は中世キリスト教世界において、重要な役割を果たしていた。キリスト教徒は様々な罪（生まれながらに負っている罪と生存中に犯した罪）を贖い、神の許しを得て死後に天国に召されることを希求した。この贖罪のために、貧者を助けたのである。「神は全ての民を富める者に創ることができたが・・・富める者たちがその罪を贖うことができるようにするために、貧しき者たちもこの世に創ったのだ」という説明があるように、キリスト教徒の魂の救済のためには貧

者は絶対不可欠な存在であった。

中世の貧民救済は、そもそも富める者たちが自らの魂の救済のために行われたため、貧者は無差別に救済され、その救済方法は儀式的なものが多かった。例えば、16世紀半ばに書かれた文学作品『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』でラサロ少年が「お葬いではうまいものが食える」[3]と述べているように、葬式のミサでは死者の遺言に従い、その場に集まった者たち「〜名に、パンとスープ」が無差別に与えられた。死者に食事を振る舞われると、貧者は弔いの行列に参加し、死者のために祈りを捧げた。また、洗礼、結婚、葬式、あるいは聖人の日などの教会の行事とは無関係な普段の日々の生活において貧者が物乞いをすると、富める者たちは無差別にお布施を与えた。貧者は施しを受けると、富める者たちに神の加護があるように祈りを捧げた。

このような日常の場における儀式的で、無差別な貧民救済を実践する代表的な場がサンティアゴ巡礼路であった。定住者は、己の魂の救済のために儀式的な慈善を行った。すなわち、聖なる貧民である行きずりの巡礼者を歓迎し、彼らの足を洗い、食事を与え、宿を提供し、そして別れの挨拶をしたのである。巡礼者は、長距離の徒歩巡礼に不可欠である宿と食事を獲得すると、定住者の魂の救済を願い、祈りを捧げた。中世における貧民観と貧民救済は、巡礼者と定住者の間にギブ・アンド・テイクの関係を成立させ、その結果としてサンティアゴ巡礼路沿いの定住者と巡礼者の間に、固定的な成員によって形成されるコミュニティではない、一見の関係に基づく流動的なコミュニティが形成された。互いの身元を確認するまでもないような固定的な成員によって形成されるコミュニティではなく、成員同士が一見の関係に基づく流動的なコミュニティにおいて、巡礼コミュニティのメンバーである身元を証明するために、巡礼者は貝殻や杖、水筒等を身につけた。

巡礼者と定住者の間に形成されたコミュニティは、定住者と行きずりの巡礼者の間の流動的なものには限られなかった。半永久的に固定的であったわけではないが、一定期間において比較的固定的な成員（住民）によって構成される集団である村落共同体や町、都市などもまた、巡礼コミュニティを形成した。これらの集団が神や聖ヤコブの加護を求めたとき、集団は住民の中から巡礼者となる人物を選出し、その者をコミュニティ代表として聖ヤコブの聖遺物崇拝の巡礼に送り出した。通常、コミュニティの中で最も利発で体力のある若者が選ばれ、コミュニティは若者の巡礼費用を負担した。若者は、巡礼の旅に出立し、晴れて帰郷することができた暁には、聖遺物崇拝によって得られる神の加護だけではなく、サンティアゴ巡礼中に広げた見聞、すなわち道中に出会った巡礼者たちから学んだ多岐にわたる知識や、様々な地域の習慣、言語、行政等に関する情報も持ち帰った。コミュニティは若者の巡礼費用を負担し、若者は巡礼を通して大きく成長し、その成果をコミュニティに還元することによって、固定的なコミュニティとそのメンバーである巡礼者の間にギブ・

アンド・テイクの関係が成立し、巡礼コミュニティが成立した。

中世において、サンティアゴ巡礼を可能にした二つの巡礼コミュニティは中世後期に入ると次第に機能しなくなっていった。まず、貧富の差が拡大し、経済的困窮者の数が増大したことにより、富めるものの魂の救済のためであっても、もはや慈善行為で貧者を救いきれなくなっていったのである。「聖なる貧民」はもはや「危険な貧民」になり、さらには巡礼者を装った詐欺師や流浪の乞食を排除するために、地元の貧者vergonzantesを優遇し、よそ者の貧者vagabundosが物乞いをすることを禁じた条例が各地で相次いでだされた[4]。「聖なる貧民」としての巡礼者（非地元民）は例外の扱いを受け、保護対象とされたが、流動的巡礼コミュニティは全盛期の様相を維持できた訳ではなかった。また、レコンキスタ終了や、対抗宗教改革の影響を受け聖人崇拝が変化し、聖ヤコブの人気が低迷したために、困難を極める巡礼路にあえて寄付を募って若者を送り出す固定的巡礼コミュニティも消滅していった。

聖ヤコブ信仰の人気が復活したのは現代に入ってからである。今日、サンティアゴ巡礼には多くの巡礼者peregrinosと観光客turistasが訪れ、巡礼路沿いの都市や村は巡礼観光客turigrinosで賑わう。現代においてサンティアゴ巡礼が再び盛んになったのは、中世と同様に巡礼コミュニティが形成されたことが大きな要因であろう。すなわち、現代においても巡礼者と定住者の間にギブ・アンド・テイクが成立するコミュニティが成立したのである。流動的な巡礼コミュニティをみてみよう。今日、巡礼路沿いの定住者は伝統的な方法で、巡礼者を「聖なる貧民」として迎え入れる。例えば、ナヴァーラ地方やリオハ地方のワイン工場はワインを無料で振る舞い、また巡礼路沿いの各地方政府はアルベルゲ・デ・ペレグリーノスという簡易宿泊施設を無料、あるいは低料金で提供する。病院は急病の巡礼者の応急処置を無料で行う所もある。教会や地方の美術館等は巡礼者の入館料を無料にする。これに対して巡礼者は、巡礼証明書credencialを携帯し、自分が巡礼コミュニティの一員であることを証明した上で上記の一見の関係を享受し、そして各地で買い物をすることにより地方経済に貢献をする。

**〈終わりに〉**

サンティアゴ巡礼は、一人で歩くが、一人ではサンティアゴに到着できない。中世においても、現代においても、相互扶助関係によって巡礼コミュニティができあがり、そしてそのことによってサンティアゴ巡礼が可能になるのである。最後に現代における固定的巡礼コミュニティについて簡単に述べて終わりたい。現代社会において、神の加護を求めて地元の村から若者を選出し、巡礼費用を負担して巡礼に送り出すというような固定的巡礼コミュニティはあまりないだろう。しかし、固定的な巡礼コミュニティを人為的に作り出すことはある。ガリシア地方政府の観光局、及び、そ

の外郭団体のシャコベオの資金援助のもとに2008年、2009年に実施されたサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学イデガ研究所のカミーノ講習は、そのいい例であろう。カミーノ講習実行委員会は、カミーノ講習奨学生を全国で募集し、日本を代表する大学生を選抜し、日本の若者をサンティアゴ巡礼に送り出した。ひとたびサンティアゴ巡礼を行った元巡礼者は、村を代表して巡礼に旅立った中世の若者と同様に、帰郷後に巡礼の話をすることで、サンティアゴ巡礼の経験やそれを通して獲得した知識をわかちあおうとするものである。講習に参加した学生が、サンティアゴ巡礼の精神に基づいて、今日も巡礼から学んだことを語り続けていることを私は願ってやまない。

---

＊　公開講座の講演、及び本稿の執筆にあたり、2012年度文部科学省科学研究費補助金（研究活動スタート支援、代表者）を使用した。

1　関哲行『スペイン巡礼史―「地の果ての聖地」を辿る』講談社現代新書、2006年。また、杉谷綾子『神の御業の物語―スペイン中世の人・聖者・奇跡』現代書館、2002年。

2　Flynn, Maureen, *Sacred Charity. Confraternities and Spocial Welfare in Spain, 1400-1700*（Ithaca: Cornell University Press, 1989）; Martz, Linda, *Poverty and Welfare in Habsburg Spain*（Cambridge: Cambridge University Press, 1983）.

3　作者不明　会田由訳『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』岩波文庫、2005年（第15刷）。

4　Valverde Perales, F.（ed.）, *Antiguas ordenanzas de la Villa de Baena*（*siglos XV y XVI*）（Baena: Ayuntamiento de Baena, Delegación de Cultura, 1998）; Pérez-Bustamante, R. and Baró Pazos, J.（eds.）, *El Gobierno y la administración de los pueblos de Cantabria*（Santander: Insitutción Cultural de Cantabria, 1988）; *Pregón general, para la buena gouernación desta Corte,* Asociación Bibliográfica Hispánica, Madrid, 1996.

# ネパールにおける巡礼
# ―ヒンドゥー教と仏教のまじわる場所

森本　泉

ネパールは、近年まで世界で唯一の「ヒンドゥー王国」を標榜する国であった。しかし、隣接するインドや中国から影響を受けてきたため、その宗教的状況は一様ではなく、更に今日ではグローバル化の影響を受け、その様相はますます複雑になってきている。このようなネパールにおける宗教をめぐる動態的な状況を、とりわけヒンドゥー教及び仏教の巡礼地に着目して報告する。

本小論では、まずⅠ章でネパールに影響を与えてきた南アジア[1]における宗教を歴史的に概観してからⅡ章でネパールにおける宗教の動向を地理的視点、歴史的視点から概観する。これらを踏まえて、Ⅲ章では個別具体的事例を取り上げて、どのような宗教的聖地であるのかを概観し、Ⅳ章で以上の宗教的状況を今日的な現象として考察し、小括する。

## Ⅰ　はじめに

ネパールの宗教的状況に多大な影響を与えてきたヒンドゥー教及び仏教の起源は、インドに求められる。ヒンドゥー教の前身であるバラモン教は、紀元前1500年から紀元前500年頃にかけて発展した。しかしながら、バラモン教に内在するバラモンを頂点とする社会的階層制度（ヴァルナ制度）に反対する動きが生じ、その動きは紀元前6世紀頃、仏教とジャイナ教の成立に結び付いた。ゴータマ・シッダールタによって開かれた仏教は、反バラモン主義として広がり、やがて南アジアから、大乗仏教として北へ、上座部仏教として南へ伝播していった。これに対し、相対的に勢力が弱体化したバラモン教は、紀元前２～３世紀頃に、土着の信仰や仏教をも包摂、吸収しながらヒンドゥー教に発展していく。

他方、7世紀にアラビア半島で興ったイスラーム教が、13世紀初頭になると南アジアに勢力を拡大するようになった。インドでは、イスラーム教徒によって仏教の僧院が破壊され、以後、インドから教団としての仏教は消滅することになった。仏教がインドで再び勢いを取り戻すのは、20世紀まで待たねばならなかった。20世紀になると、スリランカで興った上座部系の大菩提会やアンベードカルによる新仏教運動による仏教復活運動が勢いを増すようになった。また、チベット難民流入に伴いチベット仏教徒が増加したことで、インドにおける仏教に変化が見られた。これらのインドでの宗教的動向は、ネパールにも少なからぬ影響を及ぼしてきた。

## Ⅱ　ネパールにおける宗教

### 1．地理的概観―東西の十字路としてのネパール

ネパールが近年まで国教としてきたヒンドゥー教は、文化的政治的にネパール社会を規定してきたが、大きな地域差がみられるため、単純に概括することはできない。その地域差に加え、ネパールの地理的な位置性によって古くからチベット・インド交易の中継地として栄えたカトマンドゥで

1　南アジアという地域概念は近代期に創り出されたものであり、ヒンドゥー教や仏教が誕生した頃には存在しなかったが、便宜的に現在この用語が指示する範囲を本稿では南アジアとする。

は、インドのヒンドゥー教世界とチベット以東の仏教世界を結ぶ東西の十字路としてこれらの宗教の混淆状態を生み出した。この地理的位置に加え、ヒマラヤ南斜面で最大の盆地であるカトマンドゥ盆地は、温暖な気候と肥沃な土壌を基盤に多くの人口を擁し、固有の文化を育んできた。

### 2．歴史的概観―ヒンドゥー王国の建国と王朝終焉

ネパールでは、18世紀の半ばにプリトビ・ナラヤン・シャハによって国家統一されてから、ヒンドゥーによる支配が始まった。19世紀半ばからは、専制政治を敷いた宰相のラナ一族が、国法であるムルキ・アインの策定を通してヒンドゥー教を制度化し、ネパールのヒンドゥー的な社会構造がかたちづくられていくことになった。

20世紀半ばには、トリブバン国王が王政復古を果たしたことでラナによる専制政治が終わり、ヒンドゥーの神であるビシュヌの化身と位置づけられたネパール国王のもと、国家形成過程でヒンドゥー化が進められた。

1980年代に民主化を求めるジャナ・アンドーラン（民主化運動）が興り、1990年に民主化が達成されても立憲君主制ヒンドゥー王国であり続けたが、1996年に始まったマオイストによる人民戦争を経て、2008年に連邦民主共和国を宣言して王朝は幕を閉じた。しかし、世俗国家になった現在でも、ネパール国民の約8割がヒンドゥー教を信奉しており、その影響は非常に大きい。

## Ⅲ　混淆する宗教と巡礼地

### 1．「ヒンドゥー王国」ネパール

13世紀以降、イスラーム勢力の拡大はネパールにも及ぶようになり、北インドのヒンドゥー教徒の一部がヒマラヤへ逃れ、南部・西部ネパールのヒンドゥー教徒がカトマンドゥ盆地へ侵攻するようになった。ネパールはこの過程で「ヒンドゥー王国」として建国され、2008年までその状況が続く。しかしながら、既述したが、必ずしもヒンドゥー教のみで説明できるような宗教的状況ではなかったし、ヒンドゥー教の浸透の仕方も地域差や民族差が大きく、複雑な様相を呈している。

### 2．カトマンドゥ盆地―仏教とヒンドゥー教の混淆

カトマンドゥでは、インドから逃れてきたヒンドゥー教徒を受け入れ、彼／彼女らが持ち込んできた物や情報をそれまでに築かれてきた文化的要素と融合させつつ、固有の文化が発展することになった。具体的には、大乗仏教・金剛乗仏教を核とするネワール[2]仏教が、ヒンドゥー教に接近するようになった。例えば、ネワールの在家僧の一部が、ヒンドゥー教でいえば司祭の役割を担うよ

2　ネワールとは、ネパールにヒンドゥー王国が建国されるまでカトマンドゥに都市国家を築いてきたカトマンドゥを故地とするチベット・ビルマ語系民族である。古くからインドやチベットと交易してきたことから、両者からの影響を受け、民族内部にはヒンドゥー教徒と仏教徒が存在する。

うになったのをはじめ、ヒンドゥー的カーストとしてカースト的社会階層に組み込まれるようになった。こうしてヒンドゥー教徒と仏教徒が社会において複雑に関係し合いながら混淆していくことになる。また、13世紀にカトマンドゥを制覇していたマッラ王朝は、交易で得た莫大な富をもとに、ヒンドゥー教と仏教の寺院を次々と建立し、またヒンドゥー教と仏教を折衷したような寺院建築が発達し、カトマンドゥに固有の文化を発展させた。2008年にネパールが世俗国家を宣言するまで、ネワールの仏教徒から選ばれる少女神クマリが仏教徒の信仰を集める一方で、ヒンドゥーの神、ビシュヌの化身である国王がそのクマリを信仰するといった、ヒンドゥー教と仏教が混淆する状態が続いてきた。

### 3．ヒマラヤ―チベット仏教

ヒマラヤ地域では、チベット系やチベット・ビルマ語系の人々が居住すること、及びチベットに隣接する地理的位置から、チベット仏教を信仰する人々が多い。雪を頂くヒマラヤ山脈の高峰を背景にした仏教寺院の風景は、ジェイムズ・ヒルトンが「失われた地平線」の中で「凍てつくヒマラヤの山中に神秘的で楽園的な寺院があった。そこは、シャングリラと呼ばれる」と表現したように、深山幽谷の楽園、桃源郷的なイメージの原型となった。とりわけ、ネパール東部にあるエヴェレストの麓に広がるソル・クンブー地域は、そこを故地とするチベット系民族シェルパとともにシャングリラとして西洋からのまなざしによって表象され、ネパールが1951年に「開国」してから、多くの外国人を惹きつけてきた。ネパール西部のヒマラヤもまた、今日トレッキング・ルートとして人気を集め、多くの外国人を惹きつけ、チベット仏教寺院や建造物がその魅力を高めてきた。他方で、ヒマラヤにはヒンドゥー教の聖地になっている山や寺院も少なくないため、インフラ整備と共にインドからヒンドゥー教徒を惹きつけるようになった。

### 4．ルンビニ―仏陀の生誕地

仏教の開祖、ゴータマ・シッダールタの生誕地であるルンビニは、今でこそ仏教の聖地として知られる。しかし、ルンビニのマヤデビ堂では、1956年に時の国王、マヘンドラがルンビニを訪問した頃はヒンドゥー教の寺院として、動物供儀が行われていた。近隣の仏教徒がマヘンドラ国王にマヤデビ堂での動物供儀を禁止するよう働きかけ、動物供儀が行われなくなったという経緯がある。

1970年に、国連の援助を受けて国際ルンビニ開発委員会が設立され、1978年にUNDPの事業として日本の建築家、丹下健三がルンビニ開発マスタープランを作成し、1985年にはルンビニ開発公団が設立された。また、ルンビニの発掘調査が行われ、1996年にアショーカ王が置いたとされる石が発見され、1997年にユネスコの世界遺産に登録された。以後、急速に開発が進められるようになった。

次の図はルンビニ訪問者数の推移を示している。2000年前後に訪問者が減少しているのは、ネ

パールにおける政情不安が影響している。内訳をみると、1994年では訪問者のおよそ3分の1が日本人で占められていたのに対し、2011年では約4割がスリランカ人であった。この変化から、2002年以降の急増の背景に、2002年に達成されたスリランカにおける和平交渉の進展と、同年にコロンボからインド仏教遺跡の中心地であるガヤに航空便が就航したことが考えられる。2011年のデータによると、スリランカの他には、タイ、ミャンマー、中国、韓国のようにアジアからの訪問者が多い。

このルンビニ開発によって、今日、当地には上座部仏教、大乗仏教、密教の様々な宗派の仏教寺院が建造され、今も建造中である。例えば、ミャンマーのゴールデン・テンプルや日本山妙法寺のパゴダ、タイの白い仏教寺院やフランスやドイツ等が建立したチベット仏教寺院、四方に目玉がついたネパールの仏教寺院というように、多様な寺院建築様式が観察できる。これらの多種多様な寺院が、ルンビニ公園という限られた範囲に集中し、さながらテーマパークの様相を呈している。写真は丹下健三が設計した博物館の前庭に造られた平和記念公園の様子である。

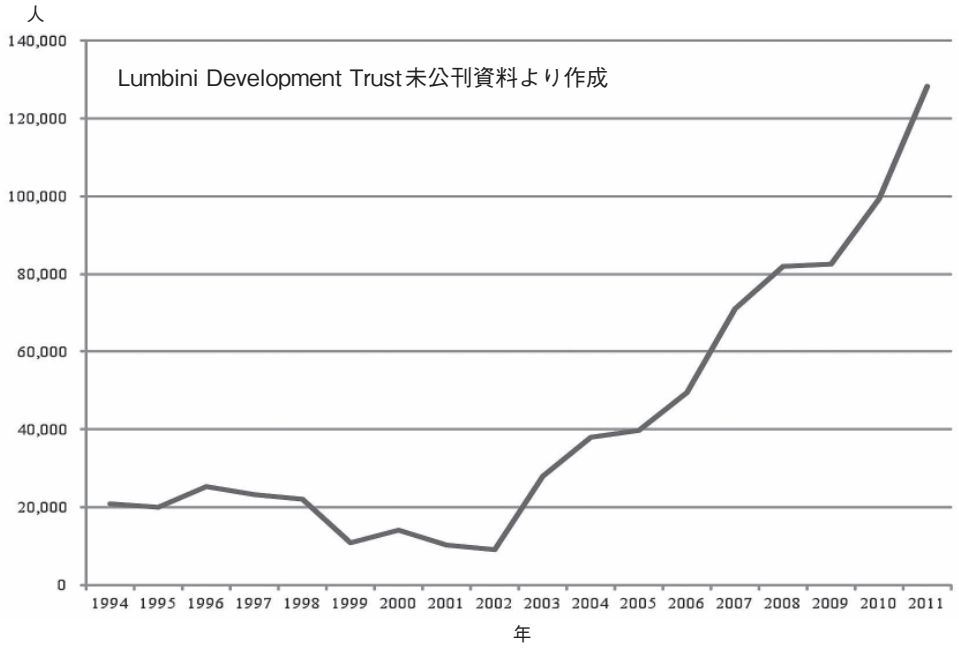


図　ルンビニ訪問者数推移

## Ⅳ　おわりに―旅する宗教

宗教は人々の移動と共に伝播していく。人々の移動先に新たな宗教的聖地が創出され、人々の生活がその地に馴染むように、宗教もまたその地に根をおろしていく。同時に、こうしてその地に根付いた宗教は、人々の移動―ここでは巡礼―を誘う契機ともなっている。

近年の巡礼をめぐって、アジア地域の経済的発展が訪問者の構成に大きな変化をもたらすようになった。つまり、豊かになったアジアの人々が巡礼に出かけるようになったのである。また、インフラ整備により、かつてのように長時間をかけ聖地に向かっていたのが、飛行機やヘリコプター、バス、ジープ等で目的地に容易に到達することが可能になり、その移動範囲も拡大した。

こうした動きを背景に、本報告の具体的事例の最後に取り上げたルンビニは、一日で世界中の多様な仏教寺院を鑑賞できる仏教テーマパークのような空間として創出された。この動きは現在進行形であり、新たな施設によって聖地の付加価値が高められ、人々の移動が動機づけられる一方で、仏教の多様な宗派がルンビニに一堂に会するようになっている。旅する巡礼者に加えて、宗教も根付いていた地域から旅するようになったといえよう。

2012年度明治学院大学秋学期公開講座報告

# 再生の聖地
# —熊野詣の歴史と文芸—

教養教育センター　嶋田 彩司

## 1．熊野信仰の歴史

古代の文献のなかに熊野が記載される例としては、『日本書紀』一書のものがよく知られている。

> 伊奘冉尊、火神を生む時に、灼かれて神退去りましぬ。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土俗、此の神の魂を祭るには、花の時には亦花を以て祭る。又鼓吹幡旗を用て、歌ひ舞ひて祭る。

ここにいうイザナミが葬られた「有馬村」とは、現在の三重県熊野市にある花の窟神社であり、そこはかつての墓所であったと考えられている。つまり、熊野こそは死者のおもむく世界だったのであり、そのことが後世の熊野信仰の隆盛の母胎となっているといえよう。

奈良時代以降、吉野から熊野にかけての一帯は、いわゆる修験道の霊場として知られることとなる。修験道は、山岳信仰（山や岩に神霊が宿るとする古神道）と仏教が習合した宗教であり、とくに8世紀後半に伝わった密教と結びついて、熊野の地は修行の場として日本固有の宗教を育みはじめる。すなわち熊野信仰の本質は、本地垂迹にもとづく現世利益（神への信仰）と来世での救済（仏教）が混淆し、一体となったものであり、熊野三山の熊野坐神社（本宮）が阿弥陀如来を本地とし、熊野速玉神社が薬師如来を、那智大社が千手観音を本地としていることにそれはあらわれている。

周知のように、やがて日本の仏教は浄土教がその中心となる。浄土教とは、阿弥陀仏に帰依して極楽往生を願う信仰であり、天台僧円仁、良源、源信等から法然、親鸞、一遍たちへとつながってゆくわけであるが、その隆盛がかつて死者のおもむく世界であった熊野を浄土への入口（あるいは浄土そのもの）として聖地たらしめることになるのである。

ところで、聖地熊野の隆盛をさいしょに牽引したのは、上皇たちの熊野詣であった。主だったものだけをあげても、

白河上皇（上皇在位期間：1086 ～ 1129）　9回
鳥羽上皇（同上：1129 ～ 1156）　21回
後白河上皇（同上：1158 ～ 1179, 1180 ～ 1192）　34回
後鳥羽上皇（同上：1198 ～ 1221）　28回

とすさまじい回数にのぼる。

歌人として名高い藤原定家（1162 ～ 1241）が後鳥羽上皇の御幸に随行した（1201年）ことは有名であるが、その記録（『明月記』）をみても、随身たちの精神的、肉体的苦労は並大抵ではない。定家が「天下の貴賤、競つてなんざん（嶋田注：南山とは熊野のこと）を営む。国家の衰弊、またこのことにあり」と記したように、それは一面において権力の濫用と国家財政の私物化ともいわれかねない一種の熱狂であった。富と繁栄の現世利益を神に祈り、血塗られた権力闘争の浄化と来世での救済を仏に願う権門盛家たちにとって、熊野はそのふたつを満たすまたとない聖地だったのである。

ところで、定家の上記記述に「貴賤」とあることは注目に値する。つまりすでにこの頃までに、

のちに「蟻の熊野詣」と表されるような庶民レベルでの熊野信仰がはじまっていたことをこれは物語っている。そして、その「賤」者のなかには、病を得た者や当時不浄の者として社会からは蔑視されていた者たちもふくまれていたであろうことは想像に難くない。事実、『明月記』松代王子（現海南市）の条には、「有盲如懐子」と開眼を願って熊野に参る乳飲み子を抱えた盲女が記録されている。

また、著名な例としては、和泉式部にまつわる逸話をあげることができる。

伏拝王子で本宮参拝を目前にして月の障り（生理）になった式部は、それを残念がって和歌を詠む。

晴れやらぬ身のうき雲のたなびきて月のさわりとなるぞかなしき

すると、その夜、式部の夢に熊野の神があらわれ、

もろともに塵にまじはる神なれば月のさわりもなにかくるしき

そう返歌したので、和泉式部はそのまま参詣することができたという逸話である。

もちろん、これは数ある和泉式部にまつわるあやしげな伝説のひとつにすぎずないが、熊野が不浄（当時、女性の生理はそのように認識されていた）をきらわない特異な霊場であったことを示す一例であることはまちがいない。13世紀以降、熊野は「信不信をえらばず、浄不浄をきらはず」（一遍聖絵より）、多くの衆生の今世・来世の信仰の場となったのである。

後年のものではあるが、1603年にイエズス会が編んだ『日葡辞書』には、

Arino cumano mairi fodo tcuzzuitayo（ありの くまの まいり ほど つづいたよ）

とある。行列をなすことの比喩として熊野の名が用いられるほど、熊野を目指す者の多かったということを（それを宣教師たちが耳にするほど譬えとして一般化していたということを）うかがい知ることができる。上皇や殿上人にはじまった熱狂は、老若貴賤男女を問わず伝染し、人々は熊野に焦がれ、ときには痛苦をおしてもこの地をめざすようになっていたのである。

## 2．小栗判官

中世において、このような熊野信仰のひろがりとたかまりを媒介したもののひとつとして、いわゆる小栗判官ものをあげることができる。要約していえば、人々に対する熊野への誘いは文芸の装いをもって全国に運搬されたのである。

小栗判官にまつわる物語の文芸や芸能は、いまでも再生産されつづけていて私たちにもなじみ深い。歌舞伎の「當世流小栗判官」は今日なお上演され、また私たちは1991年に梅原猛の脚本で上演されたスーパー歌舞伎「オグリ」を記憶している。小劇団から宝塚歌劇団まで小栗ものの舞台化も多くの観客を集めている。1990年には近藤ようこによる漫画「小栗判官」が出版され、これを読んで小栗ものの話の概略を知っている若者も多い。

そのような小栗判官ものの源流ちかくにあるのが、説経の「小栗判官」である。

説経とは、仏教の教えを庶民にわかりやすく説くために作られた物語類をいう。説経節ともいい、音曲をともなうことから大衆芸能のひとつとみなしてもよい。室町時代がジャンルとしての全盛期であり、「小栗判官」のほか「刈萱」「山椒太夫」「しんとく丸」「愛護若」のいわゆる五説経がうまれている。

ここで説経小栗判官について、かんたんに梗概を記しておく。

①小栗判官は大納言を父に鞍馬の毘沙門天の申し子として生まれた。ある日、彼は美女と恋におちるが、この女は実は深泥（みどろ）が池の大蛇であった。大蛇は子を産むところを求め神泉苑の池に行くが、池に住む竜王と争いになり、天地が振動する。小栗は天地擾乱の罪を問われ、東国へと流される。

②東国で彼は妻を求める。選んだ妻は地元の豪族、横山氏の末の娘、日光山の観音の申し子である照手姫であった。小栗は照手姫と強引に結婚する。これに怒った父は息子の三郎と語らって小栗殺害を計画する。まずは人食い馬の鬼鹿毛をけしかけるが、小栗は鬼鹿毛を手なずけて、その背に乗って曲乗りを披露する。

③失敗した横山親子は、次に毒殺を計画し、酒宴に小栗を招待する。照手姫の制止も聞かず小栗は酒宴に臨む。そして、小栗と十人の家来たちは毒殺されてしまう。小栗は土葬、十人の家来たちは火葬にされる。さらに、横山は父に背いた我が娘照手も相模川に沈めることを命令する。しかし、照手姫を乗せた牢輿は相模川を下って、ゆきとせ浦に流れ着き、村君の太夫に助けられ養子となる。ところが、太夫の妻は夫と照手姫の関係を邪推して人買いに売ってしまう。売られた照手姫は美濃国青墓宿の君の長のもとで常陸小萩と呼ばれ、下女働きをすることになる。

④一方、殺されて土葬にされた小栗は、閻魔大王のはからいで地上に戻ることになった。また十人の家来たちは閻魔大王の配下となった。塚が割れ、異形の姿となって地上に現れた小栗は「藤沢の上人」によって「餓鬼阿弥」と名づけられ、土車に乗せられて復活の約束された地、熊野湯の峰へ運ばれてゆく。東海道を上り、美濃国青墓宿に至り、照手姫の働く君の長の門前に放置された小栗を見て、常陸小萩（＝照手姫）は餓鬼阿弥を夫とは知らずに五日の間、大津まで曳いてゆくのだった。

⑤大津から熊野へ運ばれた小栗は、21日の間熊野の湯につかり、熊野権現の助力を得て、もとの小栗に復活する。都に戻り両親と対面、帝にも拝謁すると、死からの帰還は快事であるとして小栗に常陸・駿河・美濃国が与えられる。美濃国に国主として着いた小栗は、そこで下女として働く照手姫と再会をはたす。やがて、小栗と照手姫とは都に帰り、栄華のうちにすごした。

あらすじのみを記せば荒唐無稽といわざるを得ないが、要するに醜い姿で蘇生した小栗が土車に乗って熊野におもむき、再生を果たすという物語である。

そして、ここでは「藤沢の上人」に注目したい。なぜ、蘇生した小栗を「餓鬼阿弥」と名付け、「熊野湯の峰」へと運ぶはじまりが「藤沢の上人」なのか。

まず、当該箇所の原文を引いておく。

> さあらば、小栗一人を戻せと、閻魔大王様の自筆の御判をお据ゑある。「この者を、藤沢の御上人の明堂聖の一の御弟子に渡し申す。熊野本宮、湯の峯にお入れあつてたまはれや。熊野本宮、湯の峯に、お入れあつてたまはるものならば、浄土よりも薬の湯を上げべき」と、大王様の自筆の御判をお据ゑある。にんは杖といふ杖で虚空をはつたとお打ちあれば、あらありがたの御ことや築いて三年になる小栗塚が、四方へ割れてのき、卒塔婆は前へかつぱと転び、群烏笑ひける。藤沢の御上人はなんとかたへ御ざあるが、上野が原に無縁の者があるやらん、鳶、烏が笑ふやと立ち寄り御覧あれば、あらいたはしや、小栗殿（中略）足手は糸より細うして、腹はただ鞠を括たやうなもの、あなたこなたを這ひ回る。（中略）おさへて、髪を剃り形が餓鬼に似たぞとて、餓鬼阿弥陀仏とおつけある。上人、胸札を御覧ずれば、閻魔大王様の自筆の御判をお据ゑある。「この者を藤沢の御上人の明堂聖の一の御弟子に渡し申す。熊野本宮、湯の峯にお入れありてたまはれや。熊野本宮湯の峯にお入れありてたまはるものならば、浄土よりも薬の湯を上げべき」と、閻魔大王様の自筆の御判据わりたまふ。あらありがたやの御ことやと、御上人も胸札に書き添へこそはなされける。「この者を、一引き引いたは、千僧供養、二引き引いたは、万僧供養」と、書き添へをなされ、土車を作り、この餓鬼阿弥を乗せ申し、女綱男綱を打つてつけ、御上人も、車の手縄にすがりつき、えいさらえいとお引きある。

さて、「餓鬼阿弥」については、折口信夫にこれをハンセン病者の謂いであるとする指摘がある。

> 土車に乗る様な乞食は、癩病人が主な者であつた。だから、後々餓鬼阿弥を餓鬼やみと考へて、癩病の事と考へたのも無理はない。（「小栗外伝　餓鬼阿弥蘇生譚の二」）

当時、「癩病」は不治の病で、前世の罪業による「天刑病」と人々に理解されていた。当時にあっては（もちろん現在ではそれが無知にもとづく誤解であることはいうまでもない）いわば穢れた存在として差別と偏見のなかにあった者たちの代表ともいえる。それが熊野の地で復活するのである。その意味で、説経小栗判官は熊野の霊験譚であるといってよい。

そして、小栗の復活を現世において主導するのが「藤沢の上人」である。この「藤沢の上人」の名が藤沢の遊行寺（清浄光寺）に関連あるものであることは明らかであろう。遊行寺といえば時宗の総本山、開祖は一遍である。

この一遍は熊野とつながりがふかい。彼は伊予の豪族河野氏の出で、聖達（浄土宗）らに学び、他力念仏の教えを広めた人物であり、庶民の信仰を集め、踊り念仏で知られているが、熊野に詣でてそこで自らの信仰深化のきっかけをあたえられたという。すなわち、一遍が文永11（1274）年に熊野に詣でたところ、権現が現れ、「融通念仏すすむる聖、いかに念仏をばあしくすすめらるるぞ。

御房のすすめによりて一切衆生はじめて往生すべきにあらず（中略）信不信をえらばず、浄不浄をきらはず、その札をくばるべし（嶋田注：札とは「南無阿弥陀仏」と書いた賦算）」との示現をうけるのである（『一遍聖絵』）。つまり、「自力他力は初門の事なり。自他の位を打捨て、唯一念仏なるを他力といふなり」（『播州法語集』）とあるごとく、一遍に至っては法然や親鸞が説いた信心すら不要で、六字名号の札をうけとるだけで極楽往生できるとされるのであるが、そのようなラディカルな信仰のインスピレーションを一遍は熊野で得たという。

それゆえ、時宗にとって熊野は信仰上のひとつの根拠ともいうべき意味をもつ。一遍没後に弟子が足跡を詞章と絵に記録した『一遍聖絵』においても、熊野の章はハイライトのひとつである。「信不信をえらばず、浄不浄をきらはず」は熊野信仰の特質であるとともに時宗のそれでもあった。そして、『一遍聖絵』には諸国回遊の時衆（時宗信者集団）が描かれるが、そこにはハンセン病罹患者の姿が散見され得る。「餓鬼阿弥」となった小栗同様、当時「不浄」の存在であったそれらの者が、熊野と藤沢を結びつける役割を果たしているといってもよい。

こうして中世における「蟻の熊野詣」現象拡大化の一端を時衆が担うこととなる。そして、そのプロモーションに利用されたものこそが「小栗判官」であった。時宗信者たちは各地で小栗の復活を語りながら、熊野と時宗の関係を示すのである。それは人々を熊野詣に誘い、熊野信仰隆盛の一因となったが、同時にまたそれは、時宗の信仰上の正当性（正統性でもある）を熊野に寄りかかりつつ訴える効果ももっていた。

今日でも時宗寺院には小栗の物語を絵巻を用いて説く「絵解き」をおこなうところがあるように、文芸としての小栗判官ものの成立には時宗がふかく関与しているようである。そして、時宗信者が小栗の物語を全国に運ぶことによって、熊野信仰は全国にひろがり、それがそのまま時宗の布教にもなっていたという、共存関係とも互恵関係ともいえるつながりが両者のあいだには存している。

## 3．まとめ

熊野信仰は、日本古来の山岳信仰に仏教（密教）が融合し、平安時代以降、天皇家・貴族の熱狂的な信仰をあつめた。それは現世利益と来世の救済をあわせもつきわめて日本的な宗教であった。やがて、鎌倉仏教（浄土欣求）隆盛の機運をうけて、熊野信仰は庶民にひろまる。とくに時宗は布教のなかで熊野との結びつきを強調し、全国に熊野を喧伝する役割を果たした。

そのときに時宗信者が利用したものこそが物語の力であり、そのもっとも有力なひとつが「小栗判官」であった。小栗の再生にまつわる物語は、熊野が社会的弱者をも救済し得ることを示す証として、時宗教団に関係ある者によって創作され、全国に運搬されたと思われる。ハンセン病から復活する小栗の姿は、困難な生を耐えるほかない人々の希望と救いの物語であった。物語に涙し、勇気づけられた人々は、日常からの脱出を企図して熊野をめざす。それこそが「蟻の熊野詣」であった。

このように熊野は貴賤を問わず心身の浄化、再生を願う人々を呼び寄せてきた。現代では、私たち多くの者の生活からそのような切実な信仰は失われたかのように思われる。しかし、それにもかかわらず、私たちはささやかな生の希望を神に祈り、死後の平安を仏に願う。それは長い年月をかけて人々に浸透した熊野信仰のあり方に通底するもののごとくである。いまや熊野は観光地でしかない。しかし、神と仏が共存する熊野信仰のあり方は、いまなお日本人の宗教的情操の基盤に根付いているといえる。

2012年度明治学院大学秋学期公開講座報告

# 時代を映す四国遍路
# ―「救いの旅」からポストモダンツーリズムへ

門田 岳久（立教大学観光学部）

## はじめに

日本の聖地／巡礼を語る際に四国遍路を外すことはできない。「お遍路さん」と呼ばれる巡礼者を多く集め、仏教や弘法大師空海への篤い信仰が今も続けられており、現在日本でもっとも盛んな巡礼地だと言える。しかし四国遍路を単に伝統的な信仰の場と位置付けるだけでは不十分である。現在の隆盛の背景には、巡礼という宗教的実践が観光やツーリズムと結び付き、旅行会社やメディアの働きかけにより、伝統的な信仰の枠を超えた「巡礼ツーリズム」への展開があったからである。更に今でこそ四国遍路は誰もが楽しめる信仰の場ではあるが、かつては救いや人生の仕切り直しの場であり、必ずしも明るさばかりでは語れない空間でもあった。四国遍路は多面的な顔を持ち、かつその表情も時代ごとに様々に移り変わっている。本講義では四国遍路の全体的概要とともに、近代以降の宗教とツーリズムとのつながりの中で変化していく四国遍路像を明らかにした。

## 四国遍路の基本的構造

四国遍路は四国にある88の寺院を全長約1300㎞に亘って数珠繋ぎに巡っていく巡礼地である。寺院のことを「札所」あるいは「霊場」と言うため、「四国八十八カ所札所」「四国八十八カ所霊場」と呼ばれることもある。仏教に基づく巡礼地であり、とりわけ開祖である弘法大師空海の足跡をめぐる聖蹟巡礼としての性格が強く、現在に至るまで大師の功徳にすがろうとする庶民の信仰として持続してきた。

巡礼地の構造的特色を述べる際に重要なのは、目的地（＝聖地）が面的に点在し、必ずしもどこか一カ所がゴール地点というわけではないことである。つまり巡礼地として四国遍路は回遊的特性を有している。もちろん88の札所には番号が付されており、多くの巡礼者は徳島県にある1番霊山寺から香川県にある88番大窪寺まで順に辿ることを目標としているため、単線的であると言えなくもない。しかし世界各地の著名な聖地、例えばスペインのサンチャゴ・デ・コンポステラ、メッカ、エルサレムなどが一カ所のゴールを目指して皆が進む構造を有している巡礼路と比較すると、四国遍路では聖地が四国一円に点在しており、どこか便のよいところから出発すればよく、必ずしも1番からスタートする必要はない。それよりむしろ全ての札所を回り尽くすというプロセス自体に修行的価値が置かれてきた。このプロセスのことを「道中」といい、そこでの修行を道中修行という。四国遍路は道中修行を通じて徐々に信仰が深まるとされてきたのである。

このように88の札所を回遊する巡拝行為として四国遍路が定着したのは、室町時代後半とも江戸時代前半とも言われるが、明確に年代が分かっているわけではない。当初は大師が修行したルートを、弟子や真言宗の僧侶が大師の教えに触れたり功徳に与ったりするために巡り始めたのが始まりだとされているが、一般の信徒や庶民に浸透したのは17世紀後半以降だとされている。宗教史学の研究によれば、日本に数ある巡礼地の中で、近世や近代初期まで四国遍路は必ずしも最大巡礼地とは言えない地位にあったとされている。より多くの巡礼者を集めていたのは関西地方一円に拡

がる「西国三十三カ所霊場」であり、四国遍路は地元四国や瀬戸内海周辺の地域における、比較的ローカルな巡礼地であったとされている。それが現在のように国内外から多くの巡礼者を集めるようになるまでには、多くの変化があったと言える。次に四国遍路の伝統的な姿、およびそれが近代の中で変容していく姿をたどっていきたい。

## 救いと通過儀礼

近代初期までの四国遍路には大師信仰に基づく修業だけではなく、年中行事や成人になるための通過儀礼としての側面、あるいは病い治しや貧困の救いという側面も少なくなかった。

通過儀礼とは、人生の節目にあって人々の生や共同体の秩序を安定させたり、あるいは成長させたりすることを目的に営まれる儀礼である。かつて四国や瀬戸内海周辺地域では、大正，遅くとも昭和10年代まで、子供から大人になるための通過儀礼として巡礼を行う慣習があったと言われている。例えば愛媛県松山周辺の「若者遍路」は徴兵検査（20歳）の前、学校を出た仲間が若衆宿に集まり、その面々で参拝に出かけるものであった。これは「一人前」になるための儀礼であり、無事に帰郷したのちは結婚する資格があるとみなされるようになる。こうした慣習はかならずしも四国遍路に関わるものだけではなく全国各地に存在していたと思われ、民俗学の成果によれば、上方や伊勢参りに行く同年齢集団が20世紀の前半まで多くの地域で確認されている。

他方、貧者やハンセン病など病者の巡礼も、現在ではほぼなくなったと言って良い。もちろん現在でも健康を祈願する巡礼者は多いが、公的福祉の未整備な時代にあっては、在地で生活を全うすることのできなくなった人々が四国を巡ることで糧や施しを得るという、まさに生死を賭した最後の行為として行っていた。このように救いとして巡礼を行う人の中には、修行を積むことで来世の救いを願う者ばかりではなく、現世の救いを求める者、つまり食料を得ようとする者が多く含まれていたのである。

そのような人々は沿道の人々から一般の巡礼者と区別して「乞食遍路」や「ヘンド」という、多分に差別的なニュアンスを含む呼称でカテゴライズされることがあった。にもかかわらず彼らが遍路を通じて生を繋げていけたのは、接待という独特の慣習に負うところが大きい。これは巡礼を行っている者に食料や金品、場合によっては宿を供与することで、巡礼者の功徳に与ろうとする宗教的な布施である。その慣習は今でも続いているが、かつては文字通りの救いとなっていた。こうした歴史を負う四国遍路は、物見遊山という明るい信仰のイメージが付された一方で、死や病いという暗いイメージも拭いがたく付随してきたのである。

## 巡礼のツーリズム化

四国遍路の両義的なイメージに変化の兆しが訪れるのは、都市での中産階級の増加と余暇の誕生、交通の発達といった近代社会の萌芽と足並みを揃えていた。大正時代になると関西方面より旅行の

一種として四国遍路を行う新しいタイプの巡礼者が誕生したが、より抜本的な変化は、第二次世界大戦後のモータリゼーションとツーリズム産業の参入を一大契機とする。1950年代に始まった団体バスでの巡礼ツアーは、それまで遍路を思いとどまっていた比較的高齢な、徒歩では廻ることのできない人々を誘い込むことで商業的成功を収め、一時は全巡礼者の半数以上のシェアを占めていた。88ヶ所を巡るためにバスなら2週間足らずで回り終える。しかもツアーには「先達」と呼ばれる、霊場会（札所の合同組織）が公認したプロの先導役が巡礼者を案内する。

旅行会社の参入は四国遍路に様々な変化を及ぼした。例えば巡礼者の力点を道中での修行から札所での参拝へ移したり、ホテル利用が増えたことで遍路宿と呼ばれる小規模な巡礼者専用の旅館の衰退を招いたり、札所の道路やトイレの整備を後押ししたりと様々なことが挙げられるが、いずれにせよ巡礼ツアーが遍路の急拡大を促したのは紛れもない事実である。

戦後の四国遍路拡大期において、概ね1980年代までは旅行会社や霊場会の組織力、あるいは広報活動によって新たな巡礼者を獲得してきたと言って良い。しかし1990年代末に起こった四国遍路ブームは、もっぱらメディアによる波及効果であり、とりわけNHKの番組『四国八十八カ所こころの旅』（1998年～2000年）に代表される映像メディアの影響が大きい。それ以前の巡礼者は団体のバスツアーが多くを占め、比較的高齢で自力では参詣できない人々が中心だったのに比して、90年代末以降に増加した巡礼者は、自家用車利用の個人や夫婦を単位とした比較的若い世代が中心を占めるようになった。これはメディアの情報発信が基本的に個人へとダイレクトに届くことと無関係ではない。

更に近年は、数としては自動車に到底及ばないものの、歩き遍路が復活の兆しを見せていることが注目される。世代は20～40代と若く、女性や外国人も珍しくない。「通し打ち」と呼ばれる1番札所から88番札所まで一度に参拝し終える巡礼を徒歩で行った場合、成人男性の足でも50日はかかると言われている。費用も決して安いわけではなく、目安としては1日1万円程度は必要とされている。日数も費用も必要であるが、それ以上に、徒歩での参拝による身体的・精神的苦労は並大抵のものではない。ここから分かることは、現代の歩き遍路はいわば「敢えて選び取る苦行」だということである。ツアーや自動車での巡礼が発達した今では、もっと楽な旅が容易に実行可能である。にもかかわらず敢えて現代社会と逆行する価値観（不便、孤独、スロー等）を重視する人々が増えている。

「逆行」とは、言い換えるとこれまでの様々な流れに省察を加えることである。現代社会では社会や自分の人生を省察しようと試みる人が少なからずおり、巡礼はまさにその機会となっているのだ。

## 多様化する観光の一形態として

しかし現代の歩き遍路の特徴を宗教学的な観点から言えば、何よりも彼らが「無信仰」を標榜し

ているという点が重要である。なおかつ彼らがかつてのように共同体に根差した宗教的バックボーンを持たず、基本的に個人もしくは親密な少人数を単位とした都市部からの人々であるという点も、巡礼という宗教的実践の変容を考える際には重要である。

無信仰、すなわち修行や供養、大師信仰といった四国遍路伝統の宗教的裏付けを持たない巡礼者の増加は、宗教学でいうところの「宗教の世俗化」およびその結果としての「私事化」の一例であると見なされることが多い。すなわち旧来のように信仰が共同体や宗教組織を媒介として広まるのではなく、個人による選択的行為として信仰が選び取られるという考えである。また「自分探し」を一つの目的とした近年の歩き遍路を、宗教社会学でいう「新霊性運動」と同様の類型として読み取る研究もある。つまり民衆宗教としての巡礼が時代とともに変容をとげ、伝統的な大師信仰の枠組みからは外れつつあるが、個々人の心性としてはある種の宗教性を持続させている、というマクロな宗教変容の事例として位置付けられているのである。

他方観光学の観点から見れば、90年代以降の四国遍路の隆盛はマスツーリズムからポストモダンツーリズムへと至る、観光形態の拡大の一例と理解することもできる。すなわち巡礼者が経験する旅の出来事は規格化・標準化された旧来型の観光（マスツーリズム）と異なり、生き方や内面をえぐるような予測不可能なものであり、なおかつ他の巡礼者や沿道の人々との交流は、ホスト／ゲストという主客が明確に分離した旧来型の観光とも異なる様相を見せるものだ、という理解である。巡礼がツーリズムと不可分に結びついた形態のことを私を含めた何人かの研究者は「巡礼ツーリズム」という概念で説明しようとしているが、これは巡礼者の内面的経験自体が消費対象となったツーリズムであると言え、こうした現象は、観光というものの形態が急激に多様化する現在、ある意味で最先端の観光現象だと位置付けることもできる。

ツーリズム研究としての四国遍路研究はまだ端緒についたばかりで、例えば心身の健康を求めて旅をするヘルスツーリズムや、スピリチュアルツーリズムと呼ばれる精神的経験を商品化したツーリズムなど、内面や「心」を商品化した観光現象との比較研究も今後必要になってくるだろう。ツーリズムという現代的な市場経済の中で展開される巡礼を正面から捉える研究が、いま切り開かれつつある。

**参考文献**

浅川泰宏『巡礼の文化人類学的研究―四国遍路の接待文化』法蔵館、2008年
門田岳久『巡礼ツーリズムの民族誌―消費される宗教経験』森話社、2013年
星野英紀『四国遍路の宗教学的研究―その構造と近現代の展開』法蔵館、2001年

月例研究報告

# Gender and Education in Contemporary Japan

**Dawn Grimes-MacLellan**

In 1996 the Japanese government announced the "Plan for Gender Equality 2000," an initiative aimed at "helping correct the public understanding of stereotyped gender roles and mak[ing] gender equality take root in the minds of people" (Gender Equality Bureau http://www.gender.go.jp/english_contents/koudou/part2-10.html). For elementary and secondary education, the plan called for several "concrete measures" to foster gender equality through enhanced instruction, educational materials, teacher training, curricular revisions, and extracurricular activities promoting mutual understanding and cooperation between girls and boys. Gender equality, though long assured under the Constitution of Japan, became further anchored in government policy with curricular revisions in 1997 by the Ministry of Education and with the passing of the Basic Law for a Gender-Equal Society two years later "in which men and women are [to be] respected as individuals, [and] ... as equal partners to work together and take responsibility for society" (Iwao 2002). Subsequent Basic Plans for Gender Equality in 2005 and 2010 continued the call for the "enhancement of education and learning" at school, but despite these policy reform commitments, curricular change has been slow and limited primarily to the subject of home economics which now promotes gender equality through emphasis on family cooperation.

Fieldwork observations of the everyday practices at Japanese schools in several different regions of Japan, from kindergartens through high schools, suggest that even if curricular reforms demanded greater attention to gender equality, an existing hidden curriculum based not only on institutional structures but also on customary practices and tacit expectations would challenge new initiatives. Features of daily school life such as school uniforms, a boys-first class roster, gender-biased textbooks, and sports and club activities alongside teachers' personal, cultural, and gendered belief systems as well as the interpersonal relationships among students all contribute to the gender socialization of students and often the reinforcement of dominant gender relations and roles in Japanese society. While schools certainly are not the sole architects of gender socialization, they are well-positioned to lead in the reforms called for by the Basic Law for a Gender-Equal Society and the current Basic Plan for Gender Equality. However, in order for gender-neutral practices to be encouraged and established, it will first be necessary to make sustained efforts towards identifying those aspects of school environments that preserve and perpetuate gender bias. Legal provisions or public policy initiatives alone will not immediately or even in the long term guarantee gender equality in society.

月例研究報告

# 「とうとうたらりたらりら」は陀羅尼歌か

池上 康夫

古くから能の儀礼曲として神聖視され、祝いの場に舞われる＜翁（式三番）＞は、他の能とは全く別趣な様式をもって演じられてきた。その冒頭にあって、翁役の大夫によって謡われるのが「とうとうたらりたらりら。たらりあがりららりとう。（以下、地謡）ちりやたらりたらりら。たらりあがりららりとう」の神歌である。ところでこれらの詞章の由来はよく分っておらず、また現代の私たちが分らないのみならず、室町初期、能の大成期である世阿弥の時代にすでに、確たる伝承は途切れていたとみる他はない。「とうとうたらり」の意義についても不詳とせざるを得ないが、ここではその諸説について再考し、いくつかの問題を提起してみたい。

## ①一種の咒文的なものと見る見方

仏教的な咒文として歌われたとする記事は古くからみられ、陀羅尼説の根拠ともされるところである。吉田東伍の所見になる室町後期禅僧宜竹の『翰林葫蘆集』には、陀羅尼と神道の和合だとする説があるようだが（「翁（式三番）の古曲につきて」『能楽』明治三九年一月号）、管見には及ばなかった。また、天台座主忠尋によって大治元（1126）年に著されたとされる『法華五部九巻書』には、南都興福寺の僧たちが＜翁＞の父尉・翁・三番叟を、仏の三身（仏・文殊・弥勒）に当てはめて演じて見せたという記事を載せ、その序に「千里也多楽里（チリヤタラリ）」の咒文のごときものが歌われたと記すのである。

『法華五部九巻書』や世阿弥の『風姿花伝』をもとに、能勢朝次「翁猿楽考」は、「翁猿楽の父叟や三番などの芸能は、南都維摩会の学僧」によって、仏教的意義づけが試みられ、またそのような「意義づけと結合がなされるまでは、やはり修正月会や修二月会に行われた祝祷的な歌舞として存在して居たのではあるまいか」と考えたのである。

＜翁＞の冒頭の詞章を陀羅尼と断定するには至らないが、＜翁＞そのものが南都の寺院の咒師芸と切っても切りはなせないことは確かであり、そこに咒文のごとき祝祷の謡が歌われたとみることは許されるのではないかと思う。

## ②声歌（笛や鼓の擬声音）説

そうした仏教的咒文や陀羅尼の説を、最も強く否定したのは江戸時代中期の儒学者荻生徂徠である。徂徠は「とうとうたらりやらりろうといふは　楽の譜なるべし」（「荻生先生南留別志」巻五）と述べて、舞楽や雅楽の譜とする説を唱えた。徂徠には笛に関する言説が多く、音楽についての造詣は深かったと思われる。

近代にあって声歌説を押し上げたのは、歌謡音楽研究で著名な高野辰之である。高野は徂徠や吉田東伍の説に賛同し、種々の資料をあげて舞楽曲との関連を説いた。「按ずるに、トウトウは笛の音取の譜、タラリタラリラは篳篥の壹越調の音取の譜タラァリ引、タラァリ引チ引の訛である。次の阿迦利はタラリの訛らしく、次のチリヤは笛の譜である。笛と篳篥の譜を続けて謡った迄で、某

楽曲の一節ではなさそうである」と述べつつも、一例として、舞楽の悪魔払の舞である＜振鉾（えんぶ）＞の最初に笛だけで吹かれる小乱声の譜をあげている。その譜は、「ト引ト引（音取）タァハァラロ・トゥリイラァ……」と続くもので、高野自身は「さう酷似してゐるとも思はれない」とするが、見方によってはかなり近似していると言えなくもない気がする。

その後も、笛などの旋律を口でうたういわゆる声歌説は有力で、『謡曲大観』の佐成謙太郎も「笛や鼓の擬声から出たものと見るのが、穏健な見方であらう」としている。

### ③水の流れるさま・今様神歌との連関

ところで＜翁＞では、「とうとうたらり」の翁役の謡に続いて、露払の役である千歳が登場し「千歳鳴るは滝の水。鳴るは滝の水日は照るとも　地絶えずとうたりありうとうとうとう　千歳絶えずとうたり。常にとうたり」と高らかに歌い、さっそうと［千歳舞］を舞うのである。この「鳴るは滝の水」とほぼ同様の歌詞は、『梁塵秘抄』に今様四句神歌として載せられるほか、『平家物語』額打論には興福寺の荒法師が比叡山延暦寺の額を切り落とし、「うれしや水、鳴るは滝の水、日は照るとも、絶えずとうたり」と歌いはやしながら、南都の衆徒のなかに引きあげたと語られている。また能の＜安宅＞では、シテの弁慶が関守の富樫との酒宴の席で舞う［男舞］とともに謡われるが、その［男舞］は能の特殊演出ではしばしば［延年の舞］として舞われることからも、この今様歌はもとはおそらく興福寺などの大寺で法会後の余興に僧侶や呪師によって舞われた［延年舞］の歌詞であったと考えるのが妥当であろう。

そのほか＜翁＞の詞章には、伊勢の「神楽歌」に収められる今様神歌が含まれており、「とうとうたらり」ももとは何かの神楽歌であったろうとの推量もなされている。また、神仏習合の現れとして、神楽歌に呪文を唱える例（鳥海山大物忌神社蕨岡村口の宮「神歌」）なども示されており（市川寛「翁の成立」）、そこに寺院の呪師芸と神楽との習合のかたちを見て取ることも難しくはないのである。

### ④河口慧海の西蔵語説

1928年（昭和3年）東京・大阪朝日新聞紙上（4月10・12日）において慧海は、能楽「翁」前文句の西蔵語説を発表した。それらの説は今日では顧みられることもほとんどなくなったが、この記事の発表を機に、慧海は西蔵の芸術文化がわが国にいかにして伝来したかの推測を立てており、そのなかには見過ごしてしまえない所見もあるように思われる。西蔵のダラニ歌については、聖徳太子の時代に百済の味摩之（伎楽舞を伝えたとされる）か、あるいは東大寺開眼供養の導師でもあったインドの婆羅門僧正によって伝えられたのではないか（「三番叟の起原」「週刊朝日」1928年4月22日）と述べ、また西蔵語の多く含まれる催馬楽や神歌は、林邑楽を伝えたベトナム僧仏哲によってもたらされたものであろうと推理している（1930年1月19日　東京朝日新聞）。ちなみに仏哲

は東大寺を中心に、梵語を教授したとされる人物である。

世阿弥が『風姿花伝』第四神儀云に伝える、上宮（聖徳）太子「申楽延年の記」（架空の書らしい）に見える「先、神代・仏在所の始まり、月氏・辰旦・日域に伝る狂言綺語を以て、讃仏転法輪の因縁を守り、魔縁を退け、福祐を招く」の記事などとのかかわりにおいても、「式三番」の由来や外来伝承についての考察は、今後の猿楽研究の大きな課題となるであろう。

世阿弥は『風姿花伝』第四神儀云において、翁猿楽の淵源を南都興福寺維摩会の延年舞に求めている。また春日興福寺の「神事行ひ」（薪猿楽）への参勤こそが、申楽大和四座の最も重要な務めだとしたのである。

祈祷的要素の濃い翁猿楽において演ぜられる舞歌の歌詞について、明確な結論を見出すことはいまだ困難であるが、今回の考察をもとにした一応のまとめとして、「とうとうたらり」の文句は仏教の呪文的な意義づけを与えられた楽の声歌と考えておきたい。

月例研究報告

# “The Syllable is Not a Universal Prosodic Unit–a case of Japanese”

佐藤　寧

この研究発表は『カルチュール』（2013年３月号発表予定）に掲載する論文と基本的に同一内容になりますので、関心のある方は同論文をご一読ください。簡単に内容を紹介すると以下のようになります。

論題から判断できるように、この発表は韻律階層（prosodic hierarchy）のうち音節（syllable）は普遍的な韻律単位ではないことについて、日本語を例に挙げて説明しようとしたものです。戦後、日本の研究者のいわゆる「主流」と見なされる研究論文は欧米の学者の研究成果を日本語に適応し、分析したものが多く、したがってその枠組みに関して積極的に問題提起したものが皆無と言える。

しかし、個音（segment）より大きな単位が世界の言語（音韻体系）を説明する上で重要であるとの認識は、1968年のSPE（The Sound Pattern of English）以降から多くの学者が共通して持っていて、とくに今日に至ってはモーラ（mora）の単位を韻律単位として認めない音韻理論はあり得ない程になっている。ところで、このモーラは、母音と任意の（optional）子音で構成されるか、重複子音の最初の子音か、発つ音の「ん」か、引き音と呼ばれ「—」で表記される長母音の２番目の要素を指している。つまり、「カタカナ」と「ひらがな」１文字（小文字も含める）で表示される音で、日本語特有のリズムを構成し、俳句や「しりとり遊び」などに認められる。この他にも外来語、アクセントの付与規則、２つのモーラからなる拍（bimoraic foot）などにも韻律単位として存在することから、日本語では好んで用いているものと考えられる。

また、この発表では日本語にその音韻体系が近いと考えられているイタリア語も分析した。イタリア語は一般に考えられているように日本語に相似しているというよりは、むしろ英語と共有する重要な音韻体系の特徴を持っていることを指摘した。

もし、上述の主張が正しければ、全ての言語の韻律階層は、かつてモーラの言語と音節の言語に別れたことを暗示する。このことは、言語の起源を研究する際にその音韻体系も問題になるが、極めて興味ある現象と言える。

月例研究報告

# コーパスで何が出来るか、何が分かるか

仁科 恭徳

この発表では、初歩的なコーパス言語学の概要と、実際にコーパスを使うことで「どのような言語分析が可能」になり、「何が分かるのか」を簡単に紹介した。まず、英和学習辞典などに掲載されているcorpusの一般的な定義を示した後に、専門的な意味を補足した。コーパスとは、コンピュータで分析可能な大量の言語データを指す。最近では、文法標識や談話機能などのタグが各単語に付加されたものを指すことも多い。

次に、コーパスを用いることで、言語学関連分野で可能になったことをいくつか紹介した。例えば、一般参照コーパスと呼ばれる単一言語の大規模コーパスを活用することで、一昔に比べて、学習英英・英和辞典の記述が客観的になり、編纂スピードも驚異的に向上した。教材作成においても、例えば、（受験）英単語集の質が向上し、大学の英語教育で最近注目を集めているESP（English for Specific Purposes）教材の開発も可能になった。ESPとは各学問分野に特化して使用される英語（の教育・研究）を指す。また、第２言語・外国語学習者の発話データなどをコーパス化した「学習者コーパス」を用いることで、英語学習者のエラーを量的に断定しやすくなり、このようなデータが辞書・教材開発の基礎資料として参照されている。

他にも、ある言語で書かれた原著と他の言語による翻訳本をコーパス化し、コンピュータ上で一文ずつを対応させたパラレルコーパスによる貢献も大きい。このパラレルコーパスを活用することで、翻訳家の翻訳スピードが大幅に向上し産出する翻訳文が正確になったという報告や、機械翻訳の精度が改善したという実例を紹介した。このように、言語に関連する各分野においてコーパスは多大に貢献している。

最後に、コーパスを分析する上で最も重要となろうコンコーダンサーと呼ばれるコーパス解析ソフトとその分析例を取り上げた。発表内では、無償でダウンロード可能なAntConcを紹介し、同ソフトに実装されている各機能と使い方を紹介した。その後、AntConcを用いた分析事例の一つとして、1000万語の英語会話コーパスにおいてどのような単語を使われ、また、どのような統計的事実が隠されているのかを示した。特に強調したことは、2000語という高1程度の語彙サイズのみで、英語コミュニケーションの92％をカバーしているという言語事実や、英語教育上のコロケーションの重要性などである。

月例研究報告

# 最大随意等尺性収縮および伸張性収縮中の皮質脊髄路および脊髄の興奮性変調

黒川貞生，亀ヶ谷純一，橋本 肇（明治学院大学 教養教育センター），
Pedro Valadao, Avela Janne, Taija Finni (Neuromuscular Research Center, Department of Biology of Physical Activity, University of Jyväskylä)

## 【目　的】

筋の随意収縮のタイプには，等尺性収縮（Isometric contraction），短縮性収縮（Shortening contraction），伸張性収縮（Lengthening contraction）がある．これら種々の収縮様式を伴うヒトの運動制御を理解するためには，これらの運動に動員される筋線維への運動皮質および脊髄における神経制御と共に，筋線維のダイナミクスを明らかにする必要がある．なぜなら，筋出力は筋線維の長さ，速度に大きく影響を受けるからである．そこで，本研究では随意最大努力での等尺性収縮，伸張性収縮（25deg/sec）および伸張性収縮（100deg/sec）における皮質脊髄路および脊髄の興奮性と筋線維の動態を明らかにすることを目的とした．

## 【実験方法】

**被検者，タスクおよび筋電図**：被検者は健常な成人男性10名とした．等速性ダイナモメーターを用い，被検者に等尺性および伸張性（25deg/secおよび100deg/sec）の最大随意足関節底屈運動を行わせた．運動範囲は，伸張性収縮では20度（底屈位）から−15度（背屈位）の35度とした．等尺性収縮については足関節角度−10（10度背屈位）で行わせた．各運動中，腓腹筋内側頭（MG），ヒラメ筋（SOL），前頸骨筋（TA）から双極誘導により表面筋電図を導出した．なお，ヒラメ筋については単極誘導による筋電図も記録した．また，運動中の足関節トルク，足関節角度変化も記録した．

**末梢神経電気刺激**：運動中に，足関節角度−10度で，頸骨神経を超最大電気刺激強度で刺激し，ヒラメ筋双極誘導からM波の最大値（Mmax）を計測した．続いて最大M波の20±5%となるM波が出現する電気刺激強度で頸骨神経を刺激し，ヒラメ筋双極誘導からM波およびH波を誘発した．それらについて，Peak to peak値（MwaveおよびH-reflex）を計測し，H/Mmax（H-reflexとMmaxの比）を算出した．

**経頭蓋磁気刺激**：ヒラメ筋を刺激するHot spotおよび刺激の閾値をみつけ，続いて運動中に足関節角度−10度で，そのHot spotを閾値の120%の強度で刺激し，ヒラメ筋単極誘導から得られた誘発筋電位のPeak to peak値（MEP；Motor Evoked Potential）を計測した．また，Silent Periodも計測した．

**超音波Bモード画像**：運動中，ヒラメ筋および腓腹筋内側頭に超音波プローブを取り付け，連続的に超音波画像を100Hzで記録した．得られた画像から，筋線維長および羽状角を計測した．

図1．実験セットアップ

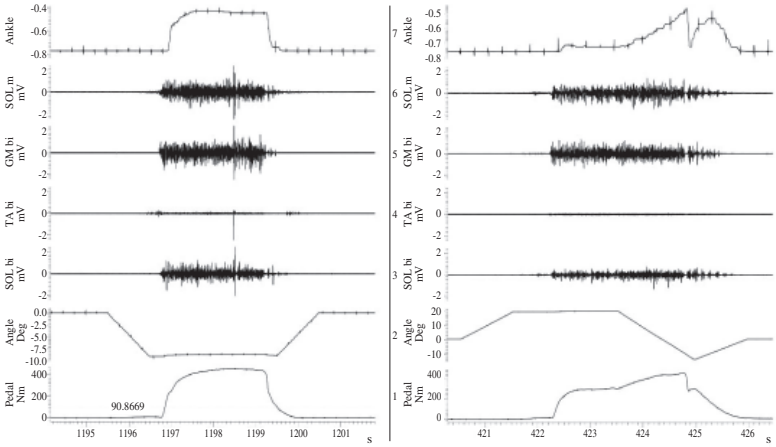


図2．典型的なデータ．上段から足関節角度, ヒラメ筋EMG（単極）, 腓腹筋EMG（双極）, 前脛骨筋EMG（双極）, 足関節角度, 足関節トルクのタイムヒストリー.

## 【結果および考察】

関節トルク：先行研究同様, 等尺性トルクに比較して, 伸張性トルクの顕著な増加は認められなかった．しかし，伸張性収縮（25deg/sec）のトルクは伸張性収縮（100deg/sec）のそれよりも有意に高い値を示した.

筋電図：ヒラメ筋のRMS（EMGの振幅）は収縮タイプによって有意な影響を受けなかった．しかし腓腹筋内側頭では，等尺性収縮におけるRMSは他の条件におけるそれらと比較して有意に大きかった．TAの共収縮レベルについては，筋収縮の違いによって有意な差は認められなかった.

末梢神経電気刺激：等尺性収縮および伸張性収縮（25deg/sec および 100deg/sec）における

MwaveとH-reflexおよびMmaxの最大値を比較した．MmaxおよびMwaveについては，等尺性収縮，伸張性収縮（25deg/sec および 100deg/sec）間で有意な差異は認められなかった．H/Mmaxについては，等尺性収縮に比べて，伸張性収縮（25deg/sec および 100deg/sec）で有意に小さい値を示した．また，伸張性収縮（25deg/sec）と伸張性収縮（100deg/sec）の間で有意差は認められなかった．これらの結果は，多くの他の研究報告と一致しており，等尺性収縮に比較して，伸張性収縮においては脊髄レベルの興奮性が低下していることが示唆された．

**経頭蓋磁気刺激**：MEPおよびMEP/Mmax（MEPをMmaxで規格化した値）については，等尺性収縮，伸張性収縮（25deg/sec および 100deg/sec）の間で有意な差が認められなかった．この結果は，3つの筋収縮タイプ間で，皮質脊髄路の興奮性は同等であることを示唆している．Silent Periodについては，等尺性収縮に比較して，伸張性収縮で有意な短縮が認められた．Silent Periodは運動皮質の抑制性を示すインデックスとされていることから，伸張性収縮におけるSilent Periodの短縮は運動皮質の興奮性の高まりを示唆している．

以上の結果から，ヒト生体では伸張性収縮中に運動野皮質の興奮性は増加し，脊髄の興奮性は低下し，結果的に皮質脊髄路の興奮性は変わらなかったと考えられる．そして，その結果として，顕著な筋出力の増加が認められないというメカニズムが考えられる．しかし，等尺性収縮および伸張性収縮中の筋線維動態の分析が未だ完了していないので，今後，それらの分析結果を含めて総合的に検討し，収縮様式の違いが筋出力を変調させるメカニズムを神経系および筋線維のメカニクスの観点から明らかにしたい．

# 2012年度ランゲージ・ラウンジ活動報告

教養教育センター　ランゲージ・ラウンジ運営委員会

## 1. 総括

2008年に始まったランゲージ・ラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくるところから始まった。現在では、英語はILSSP（Independent Language Study Support Program）を開設し、自習者自らが具体的な目的を設定し、その目的に向かって定期的にチューターと面談しながら学習することで、自律学習実践の手助けを行っている。

英語以外の外国語では、言語ごとに曜日、時限を決めてネイティブスピーカーの会話実践の場、オンライン学習の学習援助の場を提供したり、日頃の学習の補足を行ったりしている。

以上のように、各外国語がそれぞれ独自の事情を考慮しておこなっているが、今後はより積極的に学生に働きかけていく方法、自律学習をどのように促していくか、その場合にどのようにスペースを活用していくかを検討していく必要があるだろう。

## 2. 活動詳細

### 2.1 英語部門：仁科恭徳

英語部門では、昨年度に引き続き、英語の自律学習を一学期間にわたってサポートするIndependent Language Study Support Program（ILSSP）と、お昼休みに英語の学術的な講義を聴講するLuncheon Lecture Seriesを主要な活動の基軸として実施した。

まず、毎年度、参加した学生から高い評価を得てきたILSSPは、今年度も春学期と秋学期の二期に渡り実施した。毎週火曜日の12:30–15:30をコーディネーターの坂井誠氏（本学非常勤講師）との面接時間とし、各学生が設定した学習目標を達成すべく、ポートフォリオを活用して自律学習に励ませた。学生の選抜方法は、従来通りオリエンテーションを行い、募集と選抜を行った。採用予定人数を大幅に超える多くの応募があったことから、登録希望者に英語学習に対する熱意を調査用紙に記入してもらい、その内容を勘案した上で選抜した。各学期の参加者数の詳細は表1のとおりである。

表1 ILSSP実績

| 実施期間 | 参加者数 |
|---|---|
| 春学期（5月-9月） | 12名［文学部1、経済学部1、社会学部2、法学部3、国際学部4、国際学研究科1］ |
| 秋学期（11月-3月） | 11名［文学部1、経済学部2、法学部1、国際学部6、心理学部1］ |

ILSSPの事後アンケート調査の結果においても、学生にとってその内容は満足のいくものであることが分かった。

もう一つの主軸であるLuncheon Lecture Seriesについては、今年度は春学期と秋学期に1回ずつ実施した。春学期は、教養教育センター専任講師のGrimes-MacLellan Dawn氏が、「Students in the field at the side of the Great East Japan Earthquake」というタイトルで講演を行った。今年になって担当者が変わったために学生への宣伝が上手くいかず、春学期の参加者数はわずか3名であったが、講演終了後は学生と講演者による活発なディスカッションが英語で展開された。秋学期は、春学期の参加者の少なさを克服すべく、積極的に宣伝した甲斐もあって計80名が参加した。この数は、Luncheon Lecture Series始まって以来の快挙で、英語学習への高い動機づけが垣間みられた。秋学期は本学非常勤講師の坂井誠氏が「Funny English in English: Are You Sure Your English is OK?」というタイトルで講演し、学生は終始興味深く聴講していた。今後も、学内外の人材に幅広いトピックで講演して頂く予定である。また、来年度から講演回数を大幅に増やす予定でもある。

### 2.2　ドイツ語部門：吉田　真（経済学部）

「ドイツ語deランチ」と題して、野端聡美氏（本学非常勤講師）が毎週水曜日の昼休みに行った。参加人数は春学期が7～10名、秋学期が5～7名だった。参加者は主にドイツ語を履修している1年生であり、国際学部の学生がほとんどである。

春秋両学期を通して、主に扱ったのはオーストリアのKommissar Rexというドラマである。DVDを見てもらい、聞き取りの練習を行った。長い台詞等は省き、普段よく使うような短い言い回しを聞き取り、覚えてもらえるように心がけた。はじめは学生も戸惑っていたようだが、キーワードを空欄にしたプリントを作成したり、繰り返し同じ言い回しを扱うことで徐々に積極的に参加してくれるようになった。

一方、ドラマの聞き取りの合間に会話練習も行った。ドイツやオーストリアの文化や日常生活を紹介したり、電話のかけ方、レストランでの注文の仕方、お金の数え方など、ペアを組んでもらったりロールプレイをしてもらいながら練習した。

聞き取り、会話のどちらの練習の際にも、あまり文法事項に固執し過ぎないように注意はしたが、すでに授業で学んだ文法の理解を深めるような事項に関しては黒板やプリントを使って説明した。

### 2.3　スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、ランゲージ・ラウンジのスペースの利用、時間帯等を考慮して、自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、スペイン文化センターが開設しているAVE（Aula Virtual de Español）にその活動をゆだねている。春学期、秋学期にそれぞれ20名程度が受講し、そのうち6割程度が初級レベル、4割程度が中級レベルで勉強を続けている。今後は、学校内でのスムーズなサポートをどのようにするか検討する必要があり、また習ったスペイン語の実践の場を

どのように提供するかが課題である。

### 2.4　中国語部門：張宏波

2012年度の中国語部門は、授業期間中の毎週木曜に「中文会話倶楽部」を開催した。コーディネーターにははじめて日本人教員（本学非常勤講師、文化史専攻）を配置した。参加者数は例年より少なく、日中関係の影響があった可能性も考えられる。参加学生には会話の表現だけでなく、補習的な文法指導も行った。担当者からは、「やはりネイティブ教員との会話を希望する学生が少なくなかった」という趣旨の報告もあり、次年度は再びネイティブ教員を配置して実施したいと考えている。

また、「中文会話倶楽部」の存在自体がまだまだ知られていないことも明らかになった。掲示だけでなく、ポートヘボン、授業中の案内チラシの配布、実施曜日の昼休みのチラシ配布など、告知についても努力したいと考えている。

### 2.5　韓国語部門：金珍娥

2012年度韓国語ランゲージ・ラウンジにおいては、以下のような日程と体制で、韓国語自由会話を中心に週1回実施した。

担当講師：高槿旭（コグヌク）
実施期間：春学期　2012年5月8日～7月17日　（毎週火曜日）
　　秋学期　2012年9月25日～2013年1月8日（毎週火曜日）
教　　室：明治学院大学横浜校舎　424教室
時　　間：12時35分～13時20分
人　　数：春学期　6～8人、秋学期　7人

春学期には、①韓国ドラマのセリフのうち、挨拶や簡単な会話を選んで練習し，実際にそのドラマを見ながら聴きとる練習を中心に行った。②簡単な文法の説明や自己紹介、趣味、旅行、アルバイトなどをテーマに、関連語彙を提示し、会話を行った。

秋学期には、①ドラマに出る文法事項の説明や表現、②テキスト『VIVA韓国語』を中心に中級レベルの文法や表現を学び，会話を作って発表するという形で行った。

担当者高槿旭先生の全体的な感想として、以下のことが伝えられた：

韓国留学を希望する学生が多く、韓国に非常に興味を持っており、積極的に授業に臨んでいる。少人数で話しやすく、アットホームな雰囲気で教員も楽しく、とてもやりがいのある授業

であった。

学生の意見としては、①来年も続けてやりたいが、新入生が入ってくるとレベルの差が生じると思うので工夫してほしい、②いま少し時間をかけてじっくりやりたいという意見があった。

# 03 研究所プロジェクト

# 「教養教育としてのカフェ」研究：カフェ・ネットワークの構築とその意義

＊植木 献・猪瀬 浩平・上野 寛子・三角 明子　（＊は代表者）



## 猪瀬企画

2012年5月26日（土）
郡上おどりin戸塚　（会場　横浜キャンパス＆善了寺）

本年度も郡上おどりin戸塚を開催した。郡上の若手御囃子グループ「郡上舞紫」のメンバーと、郡上おどりの若手第一人者の河合研さんをゲストとして招き、横浜キャンパスでは郡上おどりの歴史的・文化的背景に迫るトークライブと、踊り講習を行った。その後、戸塚区矢部町の善了寺に移動し、郡上おどりの実演を行った。天候にも恵まれた結果、100人近くの方の参加が見られた。善了寺に併設されたデイサービスを利用するシニアの方々の参加も見られ、世代を超えた踊りの輪が広がった。本学の留学生の参加も見られ、日本の民俗文化に触れる機会にもなっている。

本年度の企画も学生と共同で行った。民俗文化を経験するだけではなく、民俗文化を経験する場をつくりだすことで、郡上おどりの理解が深まる。来年度は「郡上おどり」をつうじた戸塚の地域のコミュニティデザインの可能性について、学生と研究していきたい。

2012年6月30日（土）
カフェトーク「この場所で市民知を編む」（日本ボランティア学会と共催　会場　埼玉県立近代美術館）

現代社会における市民知の創造のされ方について検討するため、日本ボランティア学会と共催でカフェトークを開催した。

コミュニティが弱体化する中、私的空間と公共空間の境界に注目し、そこで行われる人と人との結び付きを多様に切り取り、結び付けてきたアサダワタル氏。福島で農業者･住民と協働しながら、汚染マップや放射能低減の取り組みを市民科学として組織する石井秀樹氏。全国を放浪する日常編集家、福島を拠点とする研究者、それぞれの活動と想いを受けて、市民知の組織化を企てた先駆者である高木仁三郎市民科学基金の菅波完氏、および子ども達を放射能から守る福島ネットワークの椎名千恵子さんに応答いただき、ディスカッションを行い、混迷を極めた現代、〈世界〉を手触りあるものにするための知の〈拠り所〉は何かの検討を行った。

## 三角企画

大学全体が「カフェ」のように風通しのいい、居心地のいい場所になること、そしてそんな空間づくりは自分たちにもできることを学生が実感し実践していけるように、〔充実した会話＝対話を経験し、対話の場づくりを学ぶ〕ためのシリーズを実施中。

今年度は、三角が春学期に担当したボランティア特別研究202クラスの学生たちのように実際に活動を「作って」いる学生、積極的に活動しようとする学生たちを対象とし、彼らが〔自由な、けれども雑談ではない濃い会話〕を体験しさらに自分たちがそうした場を作り出すスキルを身につける手助けになるコミュニケーション講座（三回シリーズ）を実施した。

第一回は2012年10月9日（火）に実施、講師にスマートクエスト代表・泉本竜太氏を招き、ワールドカフェ体験およびワールドカフェの実施に向けた講義や実施tipsを学ぶ機会を設けた。参加者17名。

第二回は11月13日（火）に実施。ワールドカフェを開催したいと考える学生グループを対象とし、3グループが参加した。外部講師を3名招き、各グループに1名貼り付ける形でワールドカフェのテーマ決めから扱う実践的講座となった。

この講座に参加した学生たちは、それぞれ以下の企画を実施した。

・11月7日（金）、横浜校舎インターナショナルラウンジの一部を借りてMGVA（ボランティアセンター学生スタッフ内グループ）主催のワールドカフェを開催、16名が参加した。三角は事前の企画ミーティングに参加・当日イベント内でライトニングトークを行った。

・12月11日（火）、学生団体H2Oが白金校舎パレットゾーンの一部を借りて「メイガクタイワプロジェクト どうする？　総選挙ーみらいを選ぼうー」を開催、10名が参加した。

・12月17日（月）、国際学部の高橋ゼミ内でブックカフェを開催。

2013年1月～3月には振り返りのために会合を実施し、2014年の企画についても希望を募るなど、次年度以降につなげていきたい。

### 植木企画

都市と農地、地域住民と農業従事者、学生などをアートで繋げるアート・イン・ファームという企画を共催するかたちで、西武立川駅前の茂士山農園を会場として「大地の力を呼び起こす」パーカッションライブを実施した。

日時：7月14日（土）、15日（日）午後5時～9時

会場：立川市西砂町1-43茂士山農園（西武立川駅前）

出演：パーカッショニストやぎちさと氏（演奏＆レクチャー）

アクセスの良い場所にも関わらず、明学からは残念ながら現役学生の参加はなかった。一方これまでこの企画に関わってきた卒業生と、武蔵野美術大学、早稲田大学の学生たちの間に交流が生まれ、共同の企画を模索中である。

## 上野企画

### 1）「学生FDサミット2012夏」への参加

キャンパス内でカフェを形成するための方法論やしくみについて学ぶため、8月25、26日の2日間にわたり立命館大学で開催された「学生FDサミット2012夏」に本学学生3名とともに参加した。学生FDサミットが設立されて第6回目となった今回は、過去最高である59大学から400名以上にのぼる学生と教職員が集まり、各大学でのユニークな取り組みを知り、グループワークによって大学の問題点等を議論する貴重な機会となった。なお、半数以上の学生、教職員が今回初参加であり、学生、教員、職員が三位一体となって大学を変えていく流れが急速に広がっていることを実感した。

### 2）学生主体型カフェ企画第1弾「あなたが変わる、夏。」（7月6日）および第2弾「あなたが変わる、夏。報告会」（10月29日）を8号館インターナショナルラウンジにて実施

学生たちによる、学生たちのための、大学生活活性化企画。1、2年生を対象に50名を超える学生が参加し、大学1年生の夏休みの体験でその後の人生が変わった4年生の学生をゲストに迎え、この夏休みを充実させるためのワークショップを行った。そして、夏休みに実際にアクションを起こした学生たちによる報告会を10月29日に開催した。50名を超える参加者全員が互いの体験を共有し、秋学期の目標をたてるワークショップを行った。交流を通して互いの向上心を高めあう活気ある場となった。

### 3）学生の放課後ゼミ開催「第1回：大学の“学び”とは」（10月26日）および「第2回：地域活性とは何か？～地元に帰ろう～」（12月6日）を8号館インターナショナルラウンジにて実施

正課外で学生自らが主体的に学ぶ場を学生自身が創造し、学生自らが真剣に考える場「学生の放課後ゼミ」を立ち上げた。第1回目は上野による話題提供「大学の学びについて考える ー主体的な学びとは？ー」において、“大学”の基礎知識と現状を紹介し、1年生から4年生にわたる20名超の学生が、「大学において主体的な学びを実現するためには何が必要か」について議論し、考えを深めた。第2回目は猪瀬氏のクラスを借りて、猪瀬氏と高村直喜氏の対談後、約20名の学生がそれぞれの出身県に対するイメージを語り合い、地域活性化について考えるワークを行った。

「学生FDサミット」において、日本の大学および大学生が抱える問題の現状を毎年把握してきた。正課外でも、学生たちの主体性を伸ばし、学生どうしの出会いを通して各自が多様性を知り、互いに磨きあう場が重要となっている。次年度も「繋がりとキッカケを創造する」新たな試みを実施していきたい。

# 「中国文化」へのまなざしを豊かにする 中国語初中級カリキュラムのための基礎研究

張　宏波・大森 洋子・渡辺 祐子

中国文化への理解を深めつつ中国語教育を実践している取り組みについて、以下のような調査・研究活動を行った。

- 2012年5月：首都圏の複数の大学で中国語講師を務め、教科書も編纂しているネイティブ教員へのインタビューを実施し、中国文化への理解を深める教科書作りの工夫について尋ねた。
- 2012年7月：中国語教育学会 関西地区研究会（関西大学）に参加した。今回は、youtubeやウェブアプリを用いた教材開発に取り組んでいる教員の報告が行われたため、参加して意見交換を行った。とりわけ「デジタルフラッシュカードの作りかた――音が出てゲームもできる単語カードを無料で作る！」の発表者・清原文代（大阪府立大学）氏の発表は興味深く、発表後に意見交換を行うこともできた。ラップのリズムに載せて中国語の基本フレーズをiPod等で繰り返し覚える教材を作成した清原氏が、普及が進む携帯情報端末で学習できる中国語教材を開発した経緯や内容、その反応なども伺った。学びやすさ、覚えやすさ、親しみやすさを重視して研究・実践を行っている姿勢も大変参考になった。
- 2012年8月：「2012年夏の中国語イベントin大阪 ～ 中国語ドットコム 活用術と最新情報」に参加した。これは、ポッドキャストを使って中国語を学ぶ教育プログラムなどを一般に向けて提供している中国語教育者によるイベントである。語学教室だけでなく、中国旅行や京劇体験などを交えた工夫あふれるプログラムは「楽しさ」を常に意識して計画されていて、実際に受講生の興味関心を強く引き出していることが確認できた。京劇を披露したゲストは明治大学で中国語の非常勤講師をも務めていることから、大学教育における可能性についても意見交換を行った。
- 2012年8月30～9月5日：首都師範大学国際文化学院を訪問。教育・研究担当の林副院長、国際交流を担当する張副院長らへのインタビュー・意見交換のほか、複数の初級、中級の授業を見学した。また、長年「対外漢語教学」を担当してきた教員へのインタビューおよび意見交換を行った。
- 2012年11月：「中国語入門クラス・リレー式授業の試みについて」というテーマで、本学の非常勤講師2名を講師に招き、研究会を開催した。現在、初習語教育としての中国語入門クラスは、日本人教員と中国語ネイティブ教員のペア指導体制を導入しつつある。それぞれの役割分担や、いかに言語の背後にある「文化的要素」を導入し学習者の関心を高めるかについて、教員同士で意見交換を行った。
- 2013年1月：「京劇を通じていかに中国語・中国文化を楽しく教えるか～文化的要素導入の試みについて～」というテーマで、研究会を開催した。文化的要素を導入した中国語教育の可能性を模索するため、京劇の経験を有する中国語教員を講師に迎え、文化的想像力をいかに刺激し、中国語教育の効果をより高めるかについて、教員同士で意見交換を実施した。

### 2月以降の予定

- 『リズムで学ぶ三文字中国語』（アルク）の改訂版（2012年）を出版した清原文代氏と、学期終了後にさらに意見交換を行い、新版を使った授業の反響などを確認する。
- 中国大陸から直接中国人留学生を募集しており、また日本人学生向けの「異文化理解研修」を毎年北京で実施している地方の大学を訪問し、その内容や効果について調査を実施する。また、中国人留学生の存在をどのように中国語教育のなかで活かしているのかについても調べる。
- 3月に、本PJTメンバーによる研究会を開催し、今後の課題を確認する。

### まとめにかえて

各地の中国語教育担当者による実践の現場を訪ね、聴き取りや意見交換を行うことに集中した1年だった。その結果をいかに明学の中国語教育に活かしていくのかは今後の課題となる。現時点で指摘可能なのは、テキストにとどまらず幅広い中国文化への理解を深めながら中国語教育を行っている実践者・研究者は、文化への理解が深まることと語学教育の成果に一定の関連性があることを経験的に理解しているということである。

# 青少年の健康状況と身体特性との関連性

越智 英輔・福山 勝也・森田 恭光

これまで行動体力に関する調査は幅広い年代で実施されている。その一方で、防衛体力に関しては検討が乏しい。近年、青少年の防衛体力の低下が問題視されているため、我々のグループは継続的に調査している。本年度は、青少年を対象とした防衛体力のデータ収集を継続し、かつ様々な地域の青少年を対象に質問紙、身体組成（骨･筋･脂肪）、生化学的指標を調査することを目的とした。

**・具体的な研究活動内容**

**＜実験1 関東の青少年を対象とした検討＞**

5月　実験補助者との打ち合わせ
6月　実験先との打ち合わせ
6月　実験1の実施（測定・試料回収）
9月　実験1のフィードバック

**＜実験2 関東以外の青少年を対象とした検討＞**

8-9月　実験補助者との打ち合わせと実験先の打診
10月　実験2の実施（測定・試料回収）
1月　実験2のフィードバック

上記のうち、実験1の成果については2013年3月末に発刊される学術雑誌に掲載予定である。

# 筋収縮タイプが皮質脊髄路の興奮性，筋線維動態および筋出力に及ぼす影響

黒川 貞生・亀ヶ谷 純一・橋本 肇（明治学院大学　教養教育センター），
Pedro Valadao, Avela Janne, Taija Finni (Neuromuscular Research Center, Department of Biology of Physical Activity, University of Jyväskylä)



## 【目　的】

筋の随意収縮のタイプには，等尺性収縮（Isometric contraction），短縮性収縮（Shortening contraction），伸張性収縮（Lengthening contraction）がある．等尺性収縮では，その活動中，筋・腱複合体（Muscle-Tendon Unit）の長さは変化しない．短縮性収縮では，その活動中，筋・腱複合体の長さは短くなる．一方，伸張性収縮ではその長さは長くなる．これら種々の収縮様式を伴うヒトの運動制御を理解するためには，これらの運動に動員される筋線維への運動皮質および脊髄における神経制御と共に，それらの筋線維の動態（筋線維長および羽状角の変化）を明らかにする必要がある．なぜなら，筋線維の出力は筋線維そのものの長さおよび短縮速度の影響を受けるからである．

運動皮質は中心前回の背部にあり，その機能は運動を惹起するために神経シグナルを生み出すことである．運動ニューロンは脊髄にあり，その機能は中枢からのコマンドを筋線維へ伝達し，加えて身体内（固有受容，内受容）および身体外（外受容）からの多くの情報を受容することである．これらの多くの情報は上位中枢からのコマンドを変調させ，筋線維の最終的な反応を発現させる．

近年，皮質脊髄路の興奮性を評価する方法として，経頭蓋磁気刺激法（TMS; Transcranial Magnetic Stimulation）が開発された．これは，磁気パルスを用いて大脳に非侵襲的に組織電流（活動電位）を誘導し，これが筋に達し筋収縮を起こさせる．そしてこの電気的変化は筋電図を用いて記録できる（MEPs: Motor Evoked Potentials）．このTMSを用いて，同一強度の刺激をInputし，そのOutputを記録することにより，皮質脊髄路の興奮性あるいは抑制性効果を評価することができる．一方，末梢神経の電気刺激はH反射（Hoffman reflex）を誘発し，これにより脊髄の興奮性を評価できる．そして，この両方法を用いることにより，運動中の皮質脊髄路と脊髄の興奮性を別々に評価する試みが行われている．

最近，幾人かの研究者（Gruber et al., 2009, Duclay et al., 2011）は，等尺性，短縮性および伸張性最大随意収縮中に，皮質脊髄路の興奮性を，筋の構造が変化しないという仮定のもと，任意の関節角度で計測している．しかしながら，実際には，これらの筋収縮中，筋の構造に変化が生じることが報告されている（Kurokawa et al. 2001）．筋の構造変化は筋紡錘等のレセプターからの求心性インパルに影響を及ぼし，脊髄の興奮性に変調を招来す可能性が高い．つまり，先行研究では，任意の関節角度において皮質脊髄路および脊髄の興奮性を測定したが，筋内の条件は異なっている可能性が高く，末梢からの求心性の神経入力の違い，筋線維の力-長さ関係，力-速度関係を考慮に入れていない．そこで，我々は等尺性および伸張性の最大随意収縮における皮質脊髄賂および脊髄の興奮性を筋の動態と関連させながら検討することを目的とした．

## 【実験方法】

被検者は健常な成人男性10名とした．実験に先立って，実験の趣旨等を十分に説明し，インフォームドコンセントを得た．等速性ダイナモメーターを用い，被検者に受動的足関節背屈，等尺性および伸張性の最大随意収縮による足関節底屈運動を行わせた．運動範囲は，受動的伸長および伸張性収縮ともに，20度（底屈位）から−15度（背屈位）の35度とした．等尺性収縮については足関節角度−10で行わせた．受動的伸長および伸張性収縮における運動速度は，25deg/sec（Slow）および100deg/sec（Fast）の2種類とした．

**筋電図およびトルク**：運動中，腓腹筋内側（MG），ヒラメ筋（SOL），前頸骨筋（TA）から双極誘導により表面筋電図を導出した．なお，ヒラメ筋については単極誘導による筋電図も記録した．また，運動中の足関節トルク，足関節角度変化も記録した．

**末梢神経電気刺激**：運動中に，足関節角度−10度（10度背屈位）の時点で，頸骨神経を超最大電気刺激強度で刺激し，ヒラメ筋双極誘導からM波の最大値（Mmax）を計測した．続いて最大M波の20±5%となるM波が出現する電気刺激強度で頸骨神経を刺激し，ヒラメ筋双極誘導からM波およびH波を誘発し，それらのPeak to peak値（MwaveおよびH-reflex）を計測し，H/Mmax（H-reflexとMmaxの比）を算出した．

**経頭蓋磁気刺激**：ヒラメ筋を刺激するHot spotおよび刺激の閾値をみつけた．続いて，運動中に足関節角度−10度（10度背屈位）の時点で，Hot spotを閾値の120%の強度で刺激し，ヒラメ筋単極誘導から得られた誘発筋電位のPeak to peak値（MEP；Motor Evoked Potential）を計測した．また，Silent Period（SP）も計測した．

**超音波Bモード画像**：運動中，ヒラメ筋および腓腹筋内側頭に超音波プローブを取り付け，連続的に超音波画像を100Hzで記録した．得られた画像から，筋線維長および羽状角を計測した．

## 【結果および考察】

先行研究同様，等尺性トルクに比較して，伸張性トルクの顕著な増加は認められなかった．ただし，伸張性収縮（Slow）のトルクは伸張性収縮（Fast）のそれよりも有意に高い値だった．ヒラメ筋のRMS（EMGの振幅）は収縮タイプによって有

Table 2. Effect of action type on studied variables.

| Variables | Isometric | Slow Eccentric | Fast Eccentric |
|---|---|---|---|
| Torque (Nm) | 312.5 ± 50.2 | 318.8 ± 53.4* | 276.1 ± 48.3 |
| SOL RMS (mV) | 0.318 ± 0.154 | 0.274 ± 0.073 | 0.296 ± 0.068 |
| MG RMS (mV) | 0.305 ± 0.061* | 0.247 ± 0.079 | 0.242 ± 0.077 |
| TA (coactivation %) | 10.3 ± 3.42 % | 11.9 ± 1.53 % | 14.1 ± 4.42 % |
| HD (mm) | 4.3 ± 4.3 | 3.1 ± 1.9 | 3.6 ± 2.37 |
| MEP (amp/Mmax) | 0.351 ± 0.212 | 0.327 ± 0.147 | 0.350 ± 0.184 |
| Silent Period (ms) | 62.7 ± 9.9* | 56.3 ± 10.5 | 53.0 ± 14.9 |
| Mmax (mV) | 12.3 ± 5.8 | 12.3 ± 3.77 | 12.8 ± 3.24 |
| Mwave/Mmax | 0.198 ± 0.008 | 0.200 ± 0.006 | 0.197 ± 0.006 |
| H/M | 0.542 ± 0.18 † | 0.321 ± 0.13 | 0.262 ± 0.109 |

Data are mean ± SD. * Significant at $P < 0.05$: Fast Eccentric vs. Isometric or Slow Eccentric.
† Significant at $P < 0.001$: Isometric vs. Fast and Slow Eccentric.

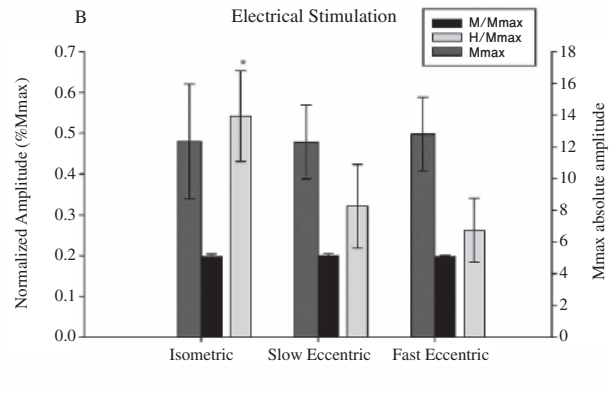


Figure 1. Effect of action type on normalized M-wave and H-reflex amplitude, and absolute Mmax amplitude.
* Significant at P < 0.001: Isometric vs. Fast and Slow Eccentric.

意な影響を受けなかったが，腓腹筋内側頭では，等尺性収縮におけるRMSは他の条件におけるそれらと比較して有意に大きかった．TAの共収縮レベルについては，筋収縮の違いによって有意な差は認められなかった（表1）．

図1は等尺性収縮および伸張性収縮（Slow & Fast Eccentric）におけるMwaveとH-reflexおよびMmaxの最大値を示したものである．MmaxおよびMwaveについては，等尺性収縮，伸張性収縮（25deg/sec），伸張性収縮（100deg/sec）間で有意な差異は認められなかった．H/Mmaxについては，等尺性収縮に比べて，伸張性収縮（Slow）および伸張性収縮（Fast）で有意に小さい値を示した．また，伸張性収縮（Slow）と伸張性収縮（Fast）の間で有意差は認められなかった．これらの結果は，多くの他の研究報告と一致しており，等尺性収縮に比較して，伸張性収縮においては脊髄レベルの興奮性が低下していることが示唆された．

**経頭蓋磁気刺激**：MEPおよびMEP/Mmax（MEPをMmaxで規格化した値）については，等尺性収縮，伸張性収縮（Slow）および伸張性収縮（Fast）の間で有意な差が認められなかった．この結果は，等尺性収縮，伸張性収縮（Slow）および伸張性収縮（Fast）において，皮質脊髄路の興奮性は同等であることを示唆している．Silent Periodについては，等尺性収縮に比較して，伸張性収縮で有意な短縮が認められた．Silent Periodは運動皮質の抑制性を示すインデックスとされていることから，

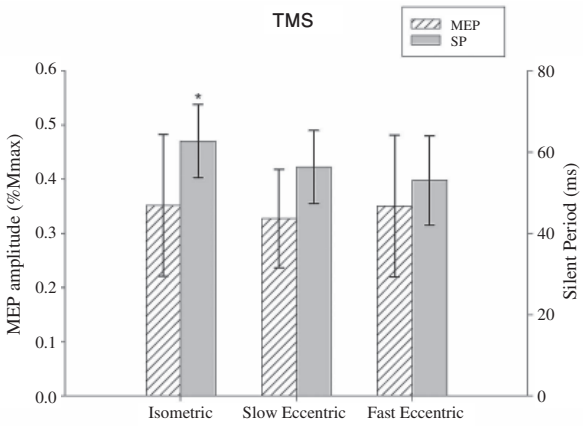


Figure 2. Effect of action type on normalized MEP amplitude and silent period. * Significant at P = 0.01: Isometric vs. Fast Eccentric.

伸張性収縮におけるSilent Periodの短縮は運動皮質の興奮性の高まりを示唆している．

摘出筋による実験では，等尺性収縮力に比較して，伸張性収縮では1.5から1.9倍の力が発揮されることが報告されている（Edman et al., 1978, Harry et al., 1990）．しかし多くのヒト生体による実験では，等尺性収縮力と伸張性収縮力における有意な差が認められていない（Duclay et al, 2011, Grubber et al., 2009, Pinninger et al., 2000, Westing et al., 1988）．本研究の結果は，これらの結果の違いを説明できる可能性がある．つまり，ヒト生体での実験では，伸張性収縮中に運動野皮質の興奮性は増加し，脊髄の興奮性は低下する．そして，相乗的な効果として皮質脊髄路の興奮性は変わらない．その結果として顕著な筋出力の増加が認められないというメカニズムが考えられる．しかし，等尺性収縮および伸張性収縮中の筋線維動態の分析が未だ分析が完了していないので，筋のメカニカルな観点からの考察が現在できない．今後，それらの分析結果を含めて総合的に検討し，収縮様式の違いが筋出力を変調させるメカニズムを神経系および筋線維のメカニクスの観点から明らかにしたい．

## References

Kurokawa, S., Fukunaga, T., Fukashiro, S. 2001. Behaviour of fascicles and tendinous structures of human gastrocnemius during vertical jumping. Journal of Applied Physiology 90, 1349-1358.

Kurokawa, S., Fukunaga, T., Nagano, A., Fukashiro, S. 2003. Interaction between fascicles and tendinous structures during counter movement jumping investigated in vivo. Journal of Applied Physiology 95, 2306-2314.

Enoka, R. M. 1994. Neuromechanical basis of kinesiology. Human Kinetics, 2nd edition.

Edman, K. A. P. 1988. Double-hyperbolic force-velocity relation in frog muscle fibres. Journal of Physiology 404, 301-321.

Duchateau, J., Enoka, R. M. 2008. Neural control of shortening and lengthening contractions: influence of task constrains. Journal of Physiology 586, 5853-5864.

Enoka, R. M. 1996. Eccentric contractions require unique activation strategies by the nervous system. Journal of Applied Physiology 81, 2339-2346.

Duclay, J., Martin, A. 2005. Evoked H-reflex and V-wave responses during maximal isometric, concentric, and eccentric muscle contraction. Journal of Neurophysiology 94, 3555-3562.

Duclay, J., Robbe, A., Pousson, M., Martin, A. 2009. Effect of angular velocity on soleus and medial gastrocnemius H-reflex during maximal concentric and eccentric muscle contraction. Journal of Electromyography and Kinesiology 19, 948-956.

Duclay, J., Pasquet, B., Martin, A., Duchateau, J. 2011. Specific modulation of corticospinal and spinal excitabilities during maximal voluntary isometric, shortening and lenghthening contractions in synergist muscles. Journal of Physiology 589, 2901-2916.

Gruber M, Linnamo V, Strojnik V, Rantalainen T, Avela J. 2009. Excitability at the motoneuron pool and motor cortex is specifically modulated in lengthening compared to isometric contractions. J Neurophysiol. 2030-2040.

# 04 研究業績

## 猪瀬 浩平

**【学会発表（個人）】**

「ポスト・フクシマ、その世界の成り立ち：―対放射能農法の組織化をめぐる人類学的考察」2012年6月、日本文化人類学会2012年度研究大会（広島大学）

“The Savage Mind in the Post-Fukushima World: An Anthropological Analysis of Research against Radioactive Contamination” 2012 年 11 月、American Anthropological Association 111th Annual Meeting（サンフランシスコ）

## 上野 寛子

**【論文（共著）】**

“Highly complex mitochondrial DNA genealogy in an endemic Japanese subterranean breeding brown frog *Rana tagoi*（Amphibia, Anura, Ranidae）” *Zoological Science* 29（10）: pp.662-671、2012年10月

**【ラウンドテーブル（話題提供者）】**

「学生が主体的に学び、考える授業の創り方？－大学コミュニティ全体のUDという発想－」第19回大学教育研究フォーラム（京都大学）、2013年3月14－15日

## 越智 英輔

**【論文】**

- Characteristics of myogenic response and ankle torque recovery after lengthening contraction-induced rat gastrocnemius injury. *BMC musculoskeletal disorders.* 13：211（総8頁）, 2012年10月.
- Genetic strain-dependent protein metabolism and muscle hypertrophy under chronic isometric training in rat gastrocnemius muscle. *Physiological Research.* 61（5）: 527-535, 2012年12月.
- 児童における生活習慣が行動体力と防衛体力に及ぼす影響. 体力・栄養・免疫学会雑誌. 印刷中.

**【学会発表】（筆頭のみ）**

- Differential expressions of tendon-related markers after fast/slow velocity lengthening contractions in rat gastrocnemius muscle. *59th Annual Meeting and 3rd World Congress on Exercise is Medicine of the American College of Sports Medicine*（San Francisco, California, USA）2012年6月.

## 金　珍娥

1. 「間投詞の出現様相と機能――日本語と韓国語の談話を中心に」,『韓国語教育論講座 第2巻』, 東京：くろしお出版, pp.427-465総39頁, 単著, 2012年10月刊行

2. 「談話論からの接近」,『韓国語教育論講座 第2巻』, 東京:くろしお出版, pp.485-520総36頁, 単著, 2012年10月刊行

3. 『ドラマティック・ハングル――君, 風の中に――』, 東京：朝日出版社, 総310頁, 単著, 2012年4月刊行

4. 『韓国語学習講座「凛」1入門』, 野間秀樹編著　東京：大修館書店, 総261頁, 2012年9月刊行

## 佐藤　寧

**【論文】**

The Syllable is Not a Universal Prosodic Unit—a case of Japanese

『カルチュール』（「教養教育センター紀要」2013年３月号掲載予定）

## 張　宏波

**【論文】**

1．加害の語りと戦後日本社会（4）　戦争を推進した社会の転換へ向けて（上）――山陰支部における「相互援助」を中心に――（共著、査読付）

『戦争責任研究』（戦争責任資料センター）第76号、2012年6月、67-78頁

2．加害の語りと戦後日本社会（5）　戦争を推進した社会の転換へ向けて（下）――「相互援助」が可能にした「加害証言」――（共著、査読付）

『戦争責任研究』（戦争責任資料センター）第78号、2012年12月、63-74頁

**【学会発表】**

伪满洲国国民动员体制下的基督教传教初探――以“热河传教”与“协和会”之关系为中心――

中国・南京師範大学主催「抗战时期都市民众日常生活国际学术研讨会」（於南京、2012年12月）

## 福山 勝也

**【その他】**

教科書（分担執筆）

「ベーシックマスター 物理化学」（築山 光一・近藤 寛・一國 伸之 共編、全424頁　オーム社）

2012年4月

第13章「速度式」（303-320頁）の執筆を担当。

**明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報**

**SYNTHESIS 2012**

2013年3月31日

---

編集代表　鈴木　義久

発 行 者　鈴木　義久

挿　　画　土方　淳代

発　　行　明治学院大学 教養教育センター付属研究所

〒244-8539　横浜市戸塚区上倉田町1518

電話 045-863-2067

印　　刷　株式会社 外為印刷

SYNTHESIS 2012
シンセシス

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報